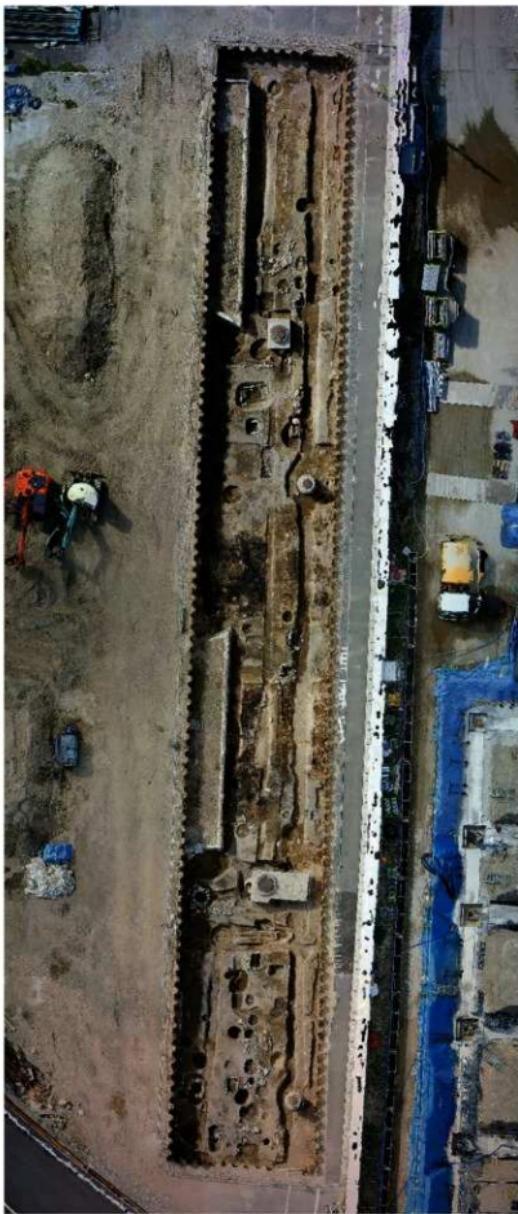


兵庫津遺跡

第69次発掘調査報告書

2018

神戸市教育委員会



第2造横面
航空写真

巻頭図版 2



調査地より北東方向を望む



S B201～S B204検出状況（北東から）



S B201焼土層検出状況（東から）

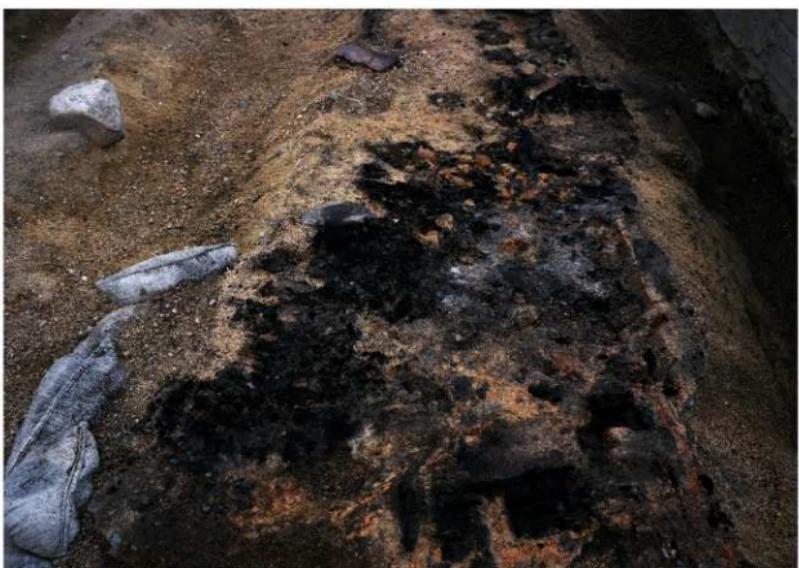


S B201炭化材検出状況（北から）

巻頭図版 4



S B203・S B204検出状況（東から）

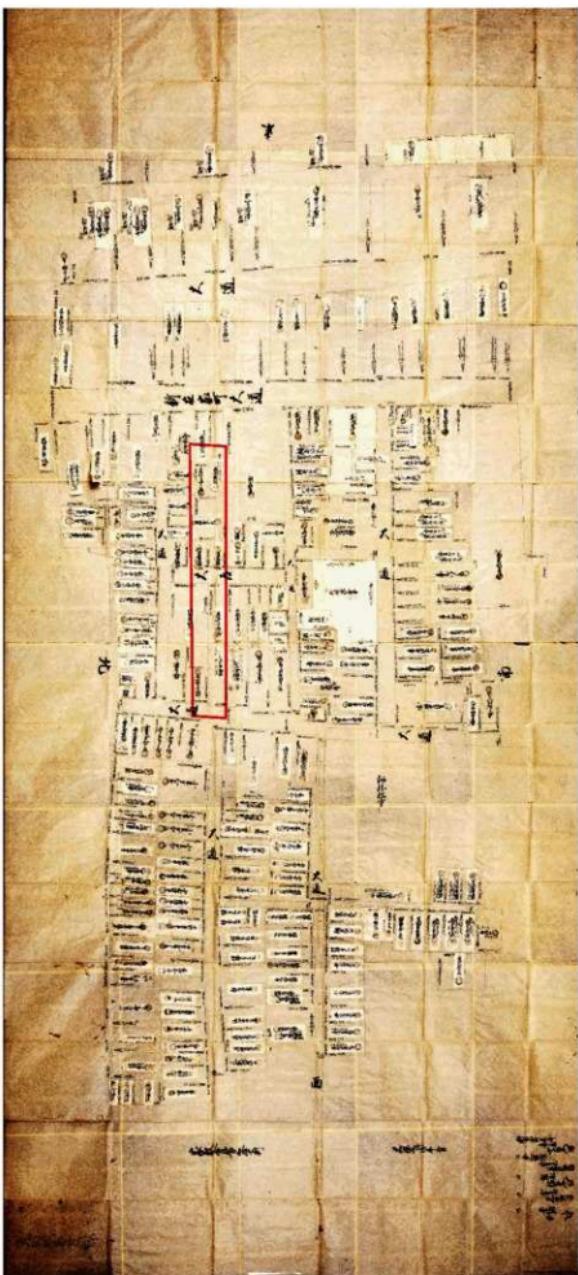


S B203焼土層検出状況（西から）



S X 127出土遺物

巻頭図版 6



新在家町水帳絵図
(朱線部分が調査地)

兵庫津遺跡

第69次発掘調査報告書

2018

神戸市教育委員会

序

わたしたちが暮らす「みなと町神戸」の原形は、古代には大輪田泊、中世以降は兵庫津と呼ばれた地域にあります。

近年、この兵庫津では毎年のように発掘調査が行われております。多くのことがらが明らかになってきました。

平成 26 年度の発掘調査では、永らくその様子が不明であった“兵庫城”に関する資料も得られています。

今回発掘調査を行った場所はその兵庫城の南側にあたる地域であり、町屋の広がりなどを確認することができました。

今回の調査で得られた資料は、過去を知り、未来へつなげるための貴重なものです。多くの皆さんに成果が共有され、活用されることを願っています。

最後になりましたが、本調査に関してさまざまご協力をいただきました関係各位の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は、神戸市兵庫区中之島2丁目において、神戸市経済観光局・㈱神戸市すまいまちづくり公社の委託を受けて実施した、兵庫津遺跡第69次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 現地における発掘調査は、平成28年8月2日～平成28年12月27日まで実施し、神戸市教育委員会文化財課 阿部敬生・内藤俊哉・阿部 功が担当した。現地調査終了後より平成29年度にかけて神戸市埋蔵文化財センターにおいて、出土遺物の整理および報告書の作成を行った。
3. 本書に掲載した、遺構等の図面のうち、各遺構面の全体図等は㈱GEOソリューションズによる航空写真測量によるものである。そのほか各遺構の平・断面図は調査担当者のほか、岡本健（同志社大学学生）・田中亮（筑波大学学生）が作成した。
4. 本書に掲載した写真図版のうち、現地における遺構写真撮影は調査担当者が行い、航空写真は、㈱GEOソリューションズによる。また遺物写真撮影は、杉本和樹氏（西大寺フォト）、巻頭図版6の写真撮影は、丸山潔氏（元神戸市教育委員会）、金属製品等のX線透過写真撮影については、文化財課 中村大介によるものである。
5. 本書の作成は、調査担当者が分担し、文責は目次に記した。第2章第2節～第6節については、東部は阿部敬生、中央部・西部については、第1・2遺構面は内藤俊哉、第3～5遺構面については阿部 功が行った。遺構のトレースは阿部敬生・内藤俊哉・阿部 功が行い、遺物実測・トレースについては㈱文化財サービスに委託したほか、阿部敬生・中村大介が行った。また、編集は阿部敬生が行った。
6. 本書の作成にあたり、東海大学 丸山真史氏より玉稿を賜りました。また出土陶磁器整理にあたっては、森村健一氏（元堺市立泉北すえむら資料館）よりご指導を受けました。また出土瓦について黒田恭正氏（元神戸市教育委員会）にご教示を得た。記して感謝申し上げます。
7. 『新在家町水帳絵図』の使用・掲載に際しては、所有者ならびに神戸市立博物館 高久智広氏・水嶋彩乃氏にご配慮いただきました。記して感謝申し上げます。
8. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面（T.P.）を、方位座標については平面直角座標系第V系（世界測地系）を使用している。
9. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸」「兵庫」「御崎公園」「中突堤」「和田岬」を使用した。
10. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センター（神戸市西区糀谷6丁目1）において保管している。
11. 現地での発掘調査および出土遺物の整理・報告書作成にあたっては、下記の関係機関ならびに諸氏にご指導・ご助言いただきました。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略）
神戸市立博物館・黒田恭正・佐伯純也・増田富士雄・森村健一・鷺尾寧一（50音順）

目 次

序	
例言	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(阿部) 1
第2節 兵庫津遺跡の立地と歴史的環境	(阿部) 3
第2章 調査の概要	(阿部 ^執 ・阿部 ^功 ・内藤) 11
第1節 調査区の設定と調査方法	11
第2節 第1遺構面	15
第3節 第2遺構面	26
第4節 第3遺構面	37
第5節 第4遺構面	51
第6節 第5遺構面	57
第3章 出土遺物	61
第1節 土器・陶磁器等	(阿部) 61
第2節 瓦塼等	(阿部) 67
第3節 土製品	(阿部) 70
第4節 石製品	(阿部) 71
第5節 転用石造物	(阿部) 72
第6節 煉瓦	(阿部) 72
第7節 金属製品	(中村) 73
第8節 兵庫津遺跡第69次調査から出土した動物遺存体	(丸山真史) 75
第4章 まとめ	85
第1節 遺構について	(内藤) 85
第2節 遺物について	(阿部) 88
第3節 結びにかえて	(阿部) 90
土器観察表	93
瓦観察表	100
遺物実測図	101

卷頭写真図版目次

図版 1	1. 第2遺構面航空写真	図版 4	1. S B203・S B204検出状況（東から）
図版 2	1. 調査地より北東方向を望む 2. S B201～S B204検出状況（北東から）		2. S B203焼土層検出状況（西から）
図版 3	1. S B201焼土層検出状況（東から） 2. S B201炭化材検出状況（北から）	図版 5	1. S X127出土遺物
		図版 6	1. 新在家町水帳絵図

挿図目次

図1	兵庫津遺跡位置図	3	図40	S E401・S E402平・断面図	54
図2	兵庫津遺跡発掘調査地点位置図	6	図41	S K401・S K402・S K404・S K405平・断面図	55
図3	調査区割図	12	図42	S B404・S B405平・断面図	56
図4	土層断面模式図	12	図43	西部西半地盤改良範囲断面図	56
図5	調査地位置図	12	図44	S X501平・断面図	57
図6	第1・2遺構面平面図	13・14	図45	第5遺構面平面図	58
図7	S E102平・断面図	15	図46	第5遺構面(東半)平面図	58
図8	S K104・S K122平・断面図	16	図47	S K501・S K502平・断面図	59
図9	S K123平・断面図	16	図48	西部落ち込み内遺物出土状況平面図	60
図10	S X101・S X128・S X129平・断面図	17	図49	出土刻印瓦拓影	68
図11	S K101・S K103・S K121平・断面図	18	図50	各層位出土軒丸瓦拓影	69
図12	S X106・S X112・S X114・S X115・S X124 平・断面図	20	図51	各層位出土軒平瓦拓影	69
図13	S X117平・断面図	20	図52	出土石製品実測図	71
図14	S X103・S X104・S X105平・断面図	21	図53	出土煉瓦拓影	72
図15	S X109・S X111・S P101平・断面図	22	図54	時期別銅錢出土数	73
図16	S K113・S X113・S X119平・断面図	23	図55	出土金属製品実測図	74
図17	S E107・S K110・S K112・S X125・S K115 平・断面図	25	図56	出土骨角製品	79
図18	S B208平・断面図	26	図57	S B305土間貝層の貝種組成	80
図19	S B209平・断面図	27	図58	『浜州八部郡福原庄兵庫津絵図』にみられる 閑星町・新在家町の表示	85
図20	S X203～S X205平面図	28	図59	第62次調査・第69次調査町屋平面図	86
図21	S X203平・断面図	28	図60	出土遺物実測図(1)	102
図22	S B201炭化材検出状況平面図	30	図61	出土遺物実測図(2)	103
図23	S B201・S B202周辺平面図	30	図62	出土遺物実測図(3)	104
図24	S B203・S B204平面図	31	図63	出土遺物実測図(4)	105
図25	S B204カマド①平・断面図	31	図64	出土遺物実測図(5)	106
図26	S X127・S X209平・断面図	33	図65	出土遺物実測図(6)	107
図27	S X211・S X208平・断面図	33	図66	出土遺物実測図(7)	108
図28	S B205・S B206周辺平面図	34	図67	出土遺物実測図(8)	109
図29	第3・4遺構面平面図	35・36	図68	出土遺物実測図(9)	110
図30	S X313・S X314平・断面図	37	図69	出土遺物実測図(10)	111
図31	S X315平・断面図	38	図70	出土遺物実測図(11)	112
図32	S X351平・断面図	39	図71	出土遺物実測図(12)	113
図33	S K301・S K302・S K303・S K307・ S K351・S X301・S X302平・断面図	41	図72	出土遺物実測図(13)	114
図34	S X308・S X316・S X321・S X323・ S X324・S X352平・断面図	45	図73	出土遺物実測図(14)	115
図35	街路断面図(第3・4遺構面)	47	図74	出土遺物実測図(15)	116
図36	S B305・S B306平面図	48	図75	出土遺物実測図(16)	117
図37	S K313・S X354平・断面図	49	図76	出土遺物実測図(17)	118
図38	西部西半遺構平面図	50	図77	出土遺物実測図(18)	119
図39	S X401・S X402・S K403・S P401 平・断面図	52	図78	出土瓦実測図(1)	120
			図79	出土瓦実測図(2)	121
			図80	出土瓦実測図(3)	122

表目次

表1	兵庫津遺跡発掘調査一覧	7	表5	出土動物遺存体集計表	82
表2	出土土錐集計表	70	表6	出土遺物観察表	93
表3	出土銅錢一覧(写真掲載分)	73	表7	出土瓦観察表	100
表4	種名表	76			

挿図写真目次

写真1	現地説明会開催風景	2	写真44	S K301遺物出土状況（北から）	42
写真2	現地説明会開催風景	2	写真45	S K301断面（西から）	42
写真3	S K122下部石組み検出状況（西から）	16	写真46	S K301遺物出土状況（北西から）	42
写真4	S K123石組み内下層断面（東から）	17	写真47	S K301遺物出土状況（北から）	42
写真5	S X128断面（西から）	17	写真48	S K302断面（西から）	42
写真6	S K103遺物出土状況（南から）	18	写真49	S K303断面（西から）	42
写真7	S K121断面（東から）	18	写真50	S K303断面（南から）	42
写真8	S K121桶内完掘状況（東から）	18	写真51	S K307断面（南から）	42
写真9	S X106石組み内断面（南から）	19	写真52	S K351断面（西から）	44
写真10	S X112石組み内断面（北から）	19	写真53	S X301断面（南から）	44
写真11	S X117石組み内上層断面（東から）	20	写真54	S X302断面（南から）	44
写真12	S X117断面（東から）	20	写真55	S X308断面（西から）	44
写真13	S X103桶内断面（南から）	21	写真56	S X316東部断面（西から）	44
写真14	S X103遺物出土状況（南から）	21	写真57	S X316西部断面（西から）	44
写真15	S X104桶内断面（南から）	21	写真58	S X316縦断中部断面（西から）	44
写真16	S X105桶内完掘状況（南から）	21	写真59	S X318遺物出土状況（北から）	46
写真17	S X109遺物出土状況（北東から）	22	写真60	S X320遺物出土状況（北から）	46
写真18	S P101孢衣蓋検出状況（北から）	22	写真61	S X321断面（西から）	46
写真19	S K113断面（北東から）	23	写真62	S X323断面（南から）	46
写真20	S X119断面（北から）	23	写真63	S B305土間貝層検出状況（北西から）	48
写真21	S E107石組み内断面（南から）	24	写真64	S B305土間貝層検出状況（北西から）	48
写真22	S K110井戸鉢？内断面（南から）	24	写真65	S K313断面（南東から）	49
写真23	S X125石組み内断面（東から）	25	写真66	S X354断面（北から）	49
写真24	S K115断面（北から）	25	写真67	S X401石組み内断面（南から）	51
写真25	S B208施土断面（東から）	26	写真68	S X401掘面断面（南から）	51
写真26	S B209土間検出状況（南から）	26	写真69	S K403断面（西から）	51
写真27	S X203石組み内断面（西から）	27	写真70	S X402断面（南から）	51
写真28	S X204石組み内完掘状況（北西から）	27	写真71	S P401断面（西から）	52
写真29	S B201壁材検出状況（西から）	30	写真72	S B402イロリ全景（北から）	53
写真30	S B201・S B205屋地背割り石列全景（東から）	30	写真73	S B403遺物出土状況（南西から）	53
写真31	S B202カマ①断面（西から）	31	写真74	S E401断面（南から）	54
写真32	S B204カマ①全景（北から）	31	写真75	S E402断面（南から）	54
写真33	S X208桶内断面（西から）	32	写真76	S K402断面（北東から）	55
写真34	S B205イロリ断面（東から）	34	写真77	S K404断面（北から）	55
写真35	S X210石組み内断面（東から）	34	写真78	東部第5遺構面全景（西から）	57
写真36	S X313断面（西から）	37	写真79	S X501断面（西から）	57
写真37	S X314石組み内断面（東から）	37	写真80	S K501断面（南から）	59
写真38	S X314石組み内完掘状況（東から）	38	写真81	S K502断面（南から）	59
写真39	S X315石組み内断面（東から）	38	写真82	西部最終層全景（北東から）	60
写真40	S X351断面（南から）	39	写真83	西部西端最終層遺物出土状況（南から）	60
写真41	S X351石組み内完掘状況（南から）	39	写真84	出土貝類	84
写真42	S X351下部断面（南から）	39	写真85	出土魚類	84
写真43	S X351下部石組み内完掘状況（東から）	39			

写真図版目次

図版1	1. 東部第1遺構面全景（北東から） 2. 中央部第1遺構面全景（北東から）	3. S X129石組み内完掘状況（東から）
図版2	1. S E102検出状況（南から） 2. S E102遺物出土状況（西から） 3. S E103検出状況（南から）	4. S X112石組み内遺物出土状況（北から）
図版3	1. S K104石組み内完掘状況（南から） 2. S K123石組み検出状況（北東から） 3. S X101遺物出土状況（北から）	5. S X114石組み検出状況（北から）
図版4	1. S X101木枠内完掘状況（北から） 2. S X128石組み内完掘状況（南から）	6. S X117石組み内完掘状況（南から）
		7. S X124石組み内完掘状況（南から）
		8. S X125石組み・遺物検出状況（東から）
		9. S X103桶内遺物出土状況（南から）
		10. S X103断面（南から）
		11. S X104桶内完掘状況（南西から）

図版 8	1. S B201～S B204焼土層上面全景（北東から） 2. S B201～S B204焼土層上面全景（北西から）	図版29	1. S B201床面出土遺物 2. S B201ほか出土遺物 3. S X127出土遺物（1）
図版 9	1. S B201上面整地層断面（北東から） 2. S B201焼土層上面検出状況（東から） 3. S B201焼土層炭化材検出状況（北から）	図版30	1. S X127出土遺物（2） 2. S X127出土遺物（3）
図版10	1. S B201焼土層炭化材検出状況（南から） 2. S B201焼土面上面全景（北東から） 3. S B201焼土面上面炭化材検出状況（北から）	図版31	1. S B204出土遺物 2. S X208出土遺物
図版11	1. S B201床面全景（北から） 2. S B201イロリ全景（西から） 3. S B201カマド全景（北西から）	図版32	1. S B205出土遺物 2. S X210出土遺物
図版12	1. S B202全景（北東から） 2. S B202カマド全景（北西から） 3. S B202集石検出状況（南西から）	図版33	1. 整地層出土遺物 2. S B205ベース層出土遺物
図版13	1. S B203・S B204焼土層上面全景（東から） 2. S B203焼土面上面全景（西から） 3. S B203断面（南東から）	図版34	1. S X313出土遺物 2. S K301出土遺物（1）
図版14	1. S B203裏炭化材検出状況（北西から） 2. S B203床面全景（西から） 3. S B204焼土層上面全景（東から）	図版35	1. S K301出土遺物（2） 2. S X301出土遺物
図版15	1. S B204焼土面上面全景（東から） 2. S B204焼土面上面全景（北西から） 3. S B204カマド①全景（北西から）	図版36	1. S K301出土遺物
図版16	1. S B204イロリ全景（南西から） 2. S B205・S B206全景（北西から） 3. S B205カマド全景（北西から）	図版37	1. S X301出土遺物 2. S X302ほか出土遺物（1） 3. S X302ほか出土遺物（2） 4. S X316出土遺物 5. 整地層出土遺物
図版17	1. S X127検出状況（南から） 2. S X127遺物出土状況（南東から） 3. S X127底部彫形検出状況（東から） 4. S X127下部石列検出状況（西から）	図版38	1. S X316出土遺物
図版18	1. S X203石組み内完掘状況（西から） 2. S X204石組み内完掘状況（北西から） 3. S X208桶内遺物出土状況（北から）	図版39	1. S X306・S X318ほか出土遺物 2. S X323出土遺物 3. S K313出土遺物 4. 第3遺構面ベース層出土遺物
図版19	1. 第3遺構面全景（東から） 2. 第3遺構面全景（西から）	図版40	1. 第3遺構面ベース層出土遺物 2. 第4遺構面ベース層出土遺物 3. 第4遺構面造成層出土遺物
図版20	1. S X313石組み内完掘状況（東から） 2. S X314石組み内完掘状況（東から） 3. S X315石組み内完掘状況（東から）	図版41	1. 出土軒丸瓦 2. 出土軒平瓦・軒柱瓦
図版21	1. S X315石組み内完掘状況（東から） 2. S X316中央跳ね検出状況（南から） 3. S X351石組み内完掘状況（南から）	図版42	1. 出土道具瓦等 2. 出土刻印瓦
図版22	1. S K301遺物出土状況（北西から） 2. S K303遺物出土状況（西から） 3. S X308遺物出土状況（西から）	図版43	1. 出土土鍾 2. 出土塗壺蓋
図版23	1. S B305全景（西から） 2. S K313石組み内完掘状況（南から） 3. S P301全景（西から）	図版44	1. 出土人形 2. 出土瓶事道具
図版24	1. 第4遺構面全景（東から） 2. 第4遺構面全景（西から）	図版45	1. 出土箇庭道具・芥子面・土鈴 2. 出土水滴
図版25	1. S B401・歛土遺構全景（北東から） 2. S B402全景（北西から）	図版46	1. 出土硯・硯石 2. 出土石造物 3. 出土石臼
図版26	1. S E102出土遺物 2. S K103出土遺物 3. S X113出土遺物（1）	図版47	1. 出土鉄製品（1） 2. 同左X線透過画像 3. 出土鉄製品（2） 4. 同左X線透過画像
図版27	1. S X113出土遺物（2） 2. S X113出土遺物（3）	図版48	1. 出土銅製品（1） 2. 同左X線透過画像 3. 出土銅製品（2） 4. 同左X線透過画像
図版28	1. S X103出土遺物 2. S K115出土遺物 3. S B201上面整地層出土遺物	図版49	1. 出土銅錢 2. 同左X線透過画像 3. 出土金属製品製作関連遺物 4. 同左X線透過画像
		図版50	1. 出土骨角製釘 2. 同左X線透過画像 3. 出土ガラス製品 4. 同左X線透過画像

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経過

今回の調査地は、神戸市中央卸売市場本場の西側跡地内に位置しており、以前は、調査地のすぐ東側を南北に走る市道高松線から、今回の調査地の西側に所在する保冷倉庫に物資を搬入あるいは同倉庫からの搬出に使用する場内道路が布設されていた。

近年、神戸市では中央卸売市場の再整備事業を実施してきており、すでに主要な施設については、高松線を挟んですぐ東側の地区へ移転が行われている。また旧本場跡地において平成26年度に発掘調査（第62次調査）が実施されており、明治期の兵庫運河の開鑿に伴ってその建物部分が失われた兵庫城本丸に伴う石垣などの遺構や、国内産や外国産（中国・朝鮮・ベトナムなど）の陶磁器類などの遺物が多量に検出されている。

今回の調査地は、前述のように場内道路が布設されていたが、今回の再整備事業に伴って、改めて街路が築造されることになった地点である。

第62次調査と同様に、今回の調査地も兵庫津遺跡の範囲内に含まれており、工事によって影響を受ける約750m²について発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。調査組織については、以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

現地調査

出土遺物整理・報告書作成

平成28年度

平成29年度

教育委員会事務局

教育委員会事務局

教育長

雪村新之助

教育長

雪村新之助

社会教育部長

日下 優

社会教育部長

日下 優

文化財課長

千種 浩

文化財課長

千種 浩

埋蔵文化財センター担当課長

安田 澤

埋蔵文化財センター担当課長

安田 澤

埋蔵文化財係長

前田 佳久

埋蔵文化財係長

前田 佳久

文化財課担当係長

斎木 巍

文化財課担当係長

松林 宏典

同

松林 宏典

同（保存科学・整理担当）

中村 大介

事務担当学芸員

山口 英正

事務担当学芸員

山口 英正

同

池田 穀

同

井上 麻子

同

井上 麻子

同

山田 侑生

調査担当学芸員

内藤 俊哉

報告書作成担当学芸員

内藤 俊哉

同

阿部 敏生

同

阿部 敏生

同

阿部 功

同

阿部 功

遺物整理担当学芸員

佐伯 二郎

遺物整理担当学芸員

谷 正俊

同

中谷 正

同

佐伯 二郎

保存科学担当学芸員

中村 大介

(3) 調査の経過

現地においては、平成28年8月2日に東側より発掘調査に着手した。

8月8日には、神戸市立六甲アイランド高等学校の校外実習として4名（男子1名、女子3名、引率教師2名）を受け入れ、発掘調査の体験を行った。

調査の効率化を図るため、ドローンによる航空写真測量を4回実施した（10月12日、11月4日、12月2日、12月13日）。

さらに、文化財啓発活動として、11月26日に現場見学会を実施し、122名の参加を得た。

12月19日には、堆積土壌について、同志社大学 増田富士雄氏より現地指導を受けた。

12月27日に、現場資材等を搬出し、コンテナハウスの撤去を行い、現地における発掘調査を終了した。



写真1 現地説明会開催風景



写真2 現地説明会開催風景

第2節 兵庫津遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区南東部の臨海部に所在する、奈良時代～江戸時代の遺跡である。⁽¹⁾昭和60年度の第1次調査以来、これまでに70回を超える発掘調査が行われている。

現在この地域は、東西にJR山陽本線、阪神高速道路3号神戸線、国道2号線などの交通の大動脈が通過し、古くから市街地化が進行した。現状での旧地形の観察は困難であるが、江戸時代に描かれた絵図や明治時代の地形図などに、失われた旧地形や景観をみることができる。特に元禄9年〔1696〕に尼崎藩の命により作成された絵図の控えである『撰州八部郡福原庄兵庫津絵図』や明治14年〔1881〕に内務省地理局測量課が刊行した『兵庫神戸実測図』などは、兵庫の港や町並みを詳細に記録したものであり、貴重な資料となっている。

兵庫津遺跡の立地を概観すると、風化の進んだ崩落しやすい性格をもつ花崗岩からなる六甲山地から流失した土砂と海流により、大阪湾岸に発達した湊岬と和田岬のふたつの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に遺跡は存在する。湾の沿岸部には浜堤が形成されている。元禄期には、南の和田岬から「須佐之入江」が潟湖状に入り込む状況が認められる。

六甲山地から湊岬へと流出していた湊川は、明治34年〔1901〕の流路付替工事により、兵庫区東山町付近から新湊川として西へ向かい、和田岬西方で大阪湾へ流入する流路へと変更された。

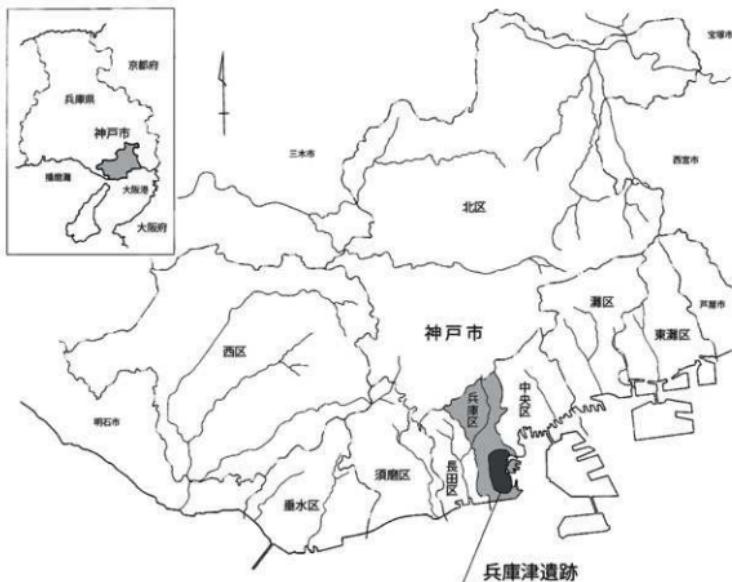


図1 兵庫津遺跡位置図

（2）兵庫津の歴史的環境

①奈良時代～平安時代

兵庫津は古くは輪田・大輪田と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして発展してきた。文献上では、平安時代後期の『行基年譜』（安元元年〔1175〕成立）に、天平13年〔741〕の記事として「大輪田船息」の名が見られ、奈良時代にはすでに港湾としての機能が窺われる。

「大輪田泊」の名称は『日本後記』弘仁3年〔812〕の記事を初見として、『日本記略』天暦元年〔947〕に至るまで、度々文献上に修復の記事が散見される。しかし、『日本記略』への記載後は、文献には現れなくなる。

②平安時代末

大輪田泊がふたたび歴史上に現れるのは、平安時代末である。

平氏一門は平治元年〔1159〕に起きた平治の乱以降、摂津国八部郡の郡司職を獲得して、権益を拡げる。嘉応元年〔1169〕に平清盛は太政大臣を辞し、京から福原の別邸へ居を移し、翌嘉応2年〔1170〕に宋の貿易船を入港させるなど積極的に大輪田泊への施策を行う。大輪田泊は、日宋貿易の拠点となった。承安年間〔1171～1174〕と治承4年〔1180〕の2度にわたり、平清盛により大輪田泊の大改修が行われたとされ、とくに承安年間の改修では「経ノ島」という人工島が造営された。しかし、治承4年の改修は和田（福原）遷都構想とともに、源頼朝、木曾義仲の挙兵などにより頓挫したまま、その後の平氏の滅亡を迎えた。

③鎌倉時代～室町時代

鎌倉時代には「兵庫嶋」の名が現れる（初見は弘安8年〔1285〕『夷帆卿記』）。また、法然（淨土宗）、叡尊（律宗）、一遍（時宗）らが兵庫に布教に訪れ、兵庫と寺社の関わりが深くなる。

弘安9年〔1286〕讃岐の普通寺に「兵庫島船別錢」の徵収権が与えられる。延慶元年〔1308〕には、伏見上皇から東大寺へ「兵庫経島升米」の永代寄付を受け、兵庫閣が寄進された。南北朝期の暦応元年〔1338〕には、室町幕府から興福寺へ修造料として「兵庫商船目錢」の徵収権が与えられ、兵庫には南北ふたつの閣が成立することになった。なお北閻の文安2年〔1445〕のほぼ1年間の入港船の記録である『兵庫北閻入船納帳』から、兵庫島の入港船数や交易された物品等を知ることができる。

室町時代には足利義満の日明貿易により遣明船の発着港となるが、応仁の乱〔1467～1477〕の兵火により荒廃、遣明船の発着港が堺へ移り衰退したとされる。ただし近年の発掘調査成果からは、その後の経済活動の衰退を立証できるものではなく、航路変更によっても港町としての繁栄は続いているものと考えられる。

④安土桃山時代以降

織田信長による花熊城攻めに功があった池田恒興は、天正8年〔1580〕に兵庫の町の中心に兵庫城を築城した。また惣構として、兵庫津を囲む土塁と堀である「都賀之堤」が築かれたとされる。天正10年〔1582〕の本能寺の変以降、天下統一を引き継いだ羽柴秀吉により、兵庫津は三好信吉（豊臣秀次）に与えられ、やがて豊臣氏の直轄地である蔵入地となる。

慶長8年〔1603〕に江戸幕府を開いた徳川家康は、元和元年〔1615〕に大坂冬の陣で豊臣氏を滅ぼした後、兵庫津を幕府直轄地とした。同3年〔1617〕には戸田氏鉄が尼崎藩主となる。兵庫津は尼崎藩領となり、兵庫には兵庫陣屋が置かれる。この後、兵庫津は明和6年〔1769〕に上知が行なわれ、再び幕府領となり、兵庫陣屋は兵庫勤番所となる。慶応3年〔1867〕には、国内の他の重要港と共に西欧諸国へ兵庫（神戸）開港、慶応4年〔1868〕には、兵庫勤番所跡

に初代兵庫県庁が置かれた。

(3) 兵庫津遺跡の既往の調査

①飛鳥時代以前

西柳原町における第64次調査では、奈良時代～江戸時代の遺跡と周知されている当遺跡においては希少な例であるが、古墳時代初頭頃の土器棺墓が検出されている。土器棺には、四国系とみられる土師器壺が使用されている。土器棺墓の周囲には溝が存在し、周溝墓である可能性が推定されている。また浜堤堆積砂内から弥生時代中期の壺が出土し、弥生時代での浜堤堆積が考えられている。古墳時代中期以降は第66次調査で、古墳時代中期末～後期頃の須恵器壺蓋が出土するなど、いくつかの地点で遺物の出土が知られているが詳細は不明である。

②奈良時代

芦原通1丁目で実施された第32次調査では、溝から奈良時代後半～平安時代前半の遺物が出土した。港湾施設の一部である可能性のある遺構も確認され、兵庫津遺跡が奈良時代に遡ることが確認された。

③平安時代～鎌倉時代

平安時代の遺物は、第26次調査などで出土が確認されているが、明確な遺構の存在など詳細は不明である。鎌倉時代の遺構も散発的であり、詳細は不明であると言わざるを得ない。

④室町時代

14世紀以降、各地点での遺構・遺物が確認される。国道2号線共同溝建設に伴う第6・11・12次調査では土坑、ピットや多くの遺物が、第14次調査では石敷建物が検出された。また、第42次調査では15世紀前半頃の鬼瓦を含む多量の瓦が出土し、大規模な建物の存在が窺われる。第14・31・51次調査などでは、土師器皿を大量に埋納もしくは廃棄した土坑が検出されている。

⑤安土桃山時代以降

神戸市中心卸売市場移転に伴う第57・62次調査では、天正8年〔1580〕に池田恒興により築かれた、「兵庫城」の堀、石垣などが確認された。明治8年〔1875〕に完成した兵庫新川運河により、北西部が失われ、現状では地上に遺構が存在していないことから「幻の城」ともいわれた兵庫城の遺構の確認は大きく注目された。また兵庫城が江戸時代以降に兵庫陣屋・兵庫勤番所として規模が縮小し、堀が次第に埋められて町場へと変化していく変遷過程も確認されている。

江戸時代の「兵庫津」は、北前船や瀬戸内海航路の基幹港、西国街道の宿場として、交通・物流の重要地点であり、最盛期は人口2万人を超える都市であった。発掘調査成果でも、この様な兵庫津の性格を裏付ける遺構・遺物の確認が続いている。以下、主なものについて挙げる。

第14・20・21・24・42・44・54・62次調査などでは町割を踏襲しながら、盛土・整地によつて行われた町屋の変遷が確認されている。また各地産の陶器・磁器や多種多様な生活用品や食物残滓が出土している。特に宮前町で実施された、第14次調査では宝永5年〔1708〕の大火と推定される火災面が検出された。また、検出された町屋群と現存する『宮前町水帳絵図』(天保9年〔1838〕)と照合できることが確認された。

兵庫津では、寛永期〔1624～43〕に和田岬の低湿地や湊川河口付近の造成以降、明和6年〔1769〕の幕府による上知後には、急速に町場が拡大することが、現存する絵図や史料から知られている。兵庫津遺跡の発掘調査でも第6・15・68次調査での佐比江の埋め立てや北方への町場の拡大、第26・66次調査などで、18世紀以降に町場が拡大していく状況が確認されている。

第15次調査の佐比江の船入江石垣検出、第26次調査の真光寺に伴う掘の北東角部検出、第29次

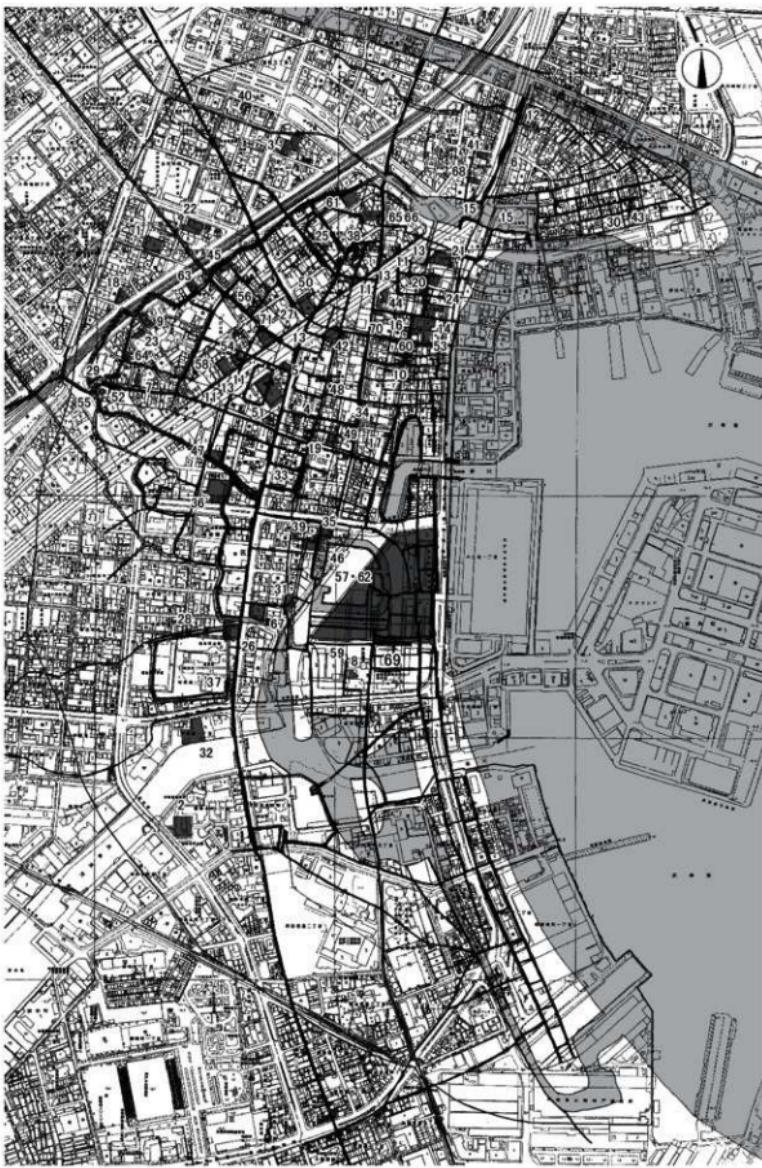


図2 兵庫津遺跡発掘調査地点位置図 ($S = 1:10,000$)

(数字は調査次数を示す。/ 下図は「元禄绘図」と明治期の地形図を元に、同絵図にみられる町割りを2,500分の1地形図に復元。)

表1 兵庫津遺跡発掘調査一覧

調査 次数	調査 年度	調査地	調査主体	調査 面積	調査内容	文献
1	1985	兵庫区三川口町1丁目	神戸市教育委員会	300	弥生時代～中世遺物包含層、中世河道・溝を検出。	1
2	1987	兵庫区御船町1丁目	大手前女子大学	1,200	中世(15c後)～幕末の遺構面4面、建物などを検出。	2
3	1988	兵庫区永沢町2丁目	神戸市教育委員会	700	土坑、足跡状遺構、畦状遺構を検出。	3
4	1990	兵庫区西宮町1丁目	神戸市教育委員会	153	縄文～須恵器時代・江戸時代・土坑、溝を検出。	4
5	1991	兵庫区西宮町2丁目	神戸市教育委員会	20	遺構なし、中世の遺物出土。	5
6	1994	兵庫区西宮町・西出町2丁目	兵庫県教育委員会	480	17c～後水戸・井戸・土坑・溝・建物などを検出。	6
7	1994	兵庫区西宮原町	神戸市教育委員会	65	江戸時代の井戸・土坑・溝を検出。	7
8	1995	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	111	阿波陀寺境内・近世遺物包含層、明治期までの本堂基壇検出。	8
9	1996	兵庫区門谷町	神戸市教育委員会	200	中世～近世遺跡層検出。	9
10	1996	兵庫区船泊町2丁目	神戸市教育委員会	50	近世の鐵物が検出。	10
11	1996	兵庫区七瀬町2丁目～西宮内町	兵庫県教育委員会	582	中世～近世後半の土坑・溝・井戸・柱穴・道路状遺構を検出。	11
12	1996	兵庫区西瀬戸町2丁目	兵庫県教育委員会	738	JR時代後開削・井戸・石垣・レリートを検出。	12
13	1997	兵庫区兵庫町1丁目～西宮内町	兵庫県教育委員会	3,600	12世紀～19c代の井戸・土坑検出。	13
14	1998	兵庫区兵庫町2丁目	神戸市教育委員会	750	中世(13c後)～幕末の遺構面8面を検出。宝永大火面検出。	14
15	1998	兵庫区兵庫町1丁目	兵庫県教育委員会	52	江戸時代～明治時代の川崎船入江石垣を検出。	15
16	1998～9	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	60	7cの遺構面を確認、17c初・鷹太町屋・宝永大火面検出。	16
17	1998～9	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	100	3面の遺構面を確認、土坑、ビット、礎石、道路状構造検出。	17
18	1999	兵庫区三川口町3丁目	神戸市教育委員会	300	近世前半以前の水田・頭を検出。	18
19	1999	兵庫区三川口町2丁目	神戸市教育委員会	60	近世2面まで調査、江戸時代初期の建物、石列を検出。	19
20	1999	兵庫区七瀬町2丁目	神戸市教育委員会	320	16c末～18cの遺構面9面、町屋、道路、宝永大火面を検出。	20
21	1999	兵庫区七瀬町2丁目	神戸市教育委員会	280	13c後～18c末の遺構面7面を確認。町屋、道路、脛衣蓋検出。	21
22	1999	兵庫区三川口町3丁目	神戸市教育委員会	200	14c前～16c後の大水田層を4面検出。	22
23	2000	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	266	近世後半～末の溝、ビット、落ち込みを検出。	23
24	2001	兵庫区七瀬町2丁目	神戸市教育委員会	250	中世後半～都心の遺構面9面、町屋を検出。	24
25	2001	兵庫区長田町2丁目	神戸市教育委員会	175	17c後～19cの遺構面9面を確認。町屋、井戸、溝を検出。	25
26	2001	兵庫区南河野町1丁目	神戸市教育委員会	745	中世、18c～19cの遺構面2面、真光寺の廻、道路、河通。	26
27	2001	兵庫区三川口町1丁目	神戸市教育委員会	14	17c後半の土坑、18c後半の土坑を検出。	27
28	2002	兵庫区南河野町1丁目	神戸市教育委員会	32	近世未端の道路状遺構を検出。	28
29	2002	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	75	安土桃山～幕末遺構面4面。柳原町門閑道、尼崎藩領柱標。	29
30	2002	兵庫区東山町3丁目	神戸市教育委員会	20	6面の遺構面を確認、18cを中心とする町屋を検出。	30
31	2002	兵庫区切戸町	神戸市教育委員会	187	室町時代～近世後半の遺構面3面を確認。近世後期水路。	31
32	2003	兵庫区芦原通1丁目	神戸市教育委員会	40	奈良時代～平安・平安時代前の溝2条を検出。	32
33	2004	兵庫区神戸町	神戸市教育委員会	320	遺構面3面。中世末土師器と集積土塙、溝。江戸時代中期墓地。	33
34	2004	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	50	室町時代～江戸時代の遺構面5面を確認。	34
35	2004	兵庫区切戸町	神戸市教育委員会	70	瓦屋城間連遺構の確認。兵庫陣屋および勘番所北西隅近く。	35
36	2004～5	兵庫区北淡洲町1丁目	神戸市教育委員会	800	遺構面3面。中世末の溝、柱穴、桂穴、江戸時代の建物基壇、墓地	36
37	2005	兵庫区松原通1丁目	神戸市教育委員会	69	近世以後の整理層内、真光寺境内を含む跡の別?を検出。	37
38	2005	兵庫区兵庫町1丁目	兵庫縣歴史跡調査会	273	前7c～19c代の遺構面4面、土坑、溝、柱穴を検出。	38
39	2005	兵庫区切戸町	神戸市教育委員会	100	室町時代築石垣構造。多量の遺物を含む包石層、近世の井戸。	39
40	2006	兵庫区北淡洲町3丁目	神戸市教育委員会	42	JR時代中期の井戸、江戸時代後期～幕末の石列を検出。	40
41	2006	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	40	中世(15c)、江戸時代後期(19c)の遺物包装層を確認。	41
42	2006	兵庫区西仲町	神戸市教育委員会	445	15c～19cの遺構面7面、土坑、町屋を検出(火災面2面)。	42
43	2006	兵庫区東山町3丁目	神戸市教育委員会	45	近世の石垣、落ち込み。近代後半の石垣を検出。	43
44	2006	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	250	JR時代の遺構面5面を確認。町屋、土坑、葉石造構造検出。	44
45	2007	兵庫区北淡洲町1丁目	神戸市教育委員会	493	3面の遺構面を確認。中世後半の井戸、土坑、江戸時代墓地。	45
46	2007	兵庫区切戸町	神戸市教育委員会	9	近世の石垣を検出。	46
47	2007	兵庫区北淡洲町2丁目	神戸市教育委員会	40	2面の遺構面を確認。江戸時代井戸、幕末～明治時代石垣・塀。	47
48	2008	兵庫区本町2丁目	神戸市教育委員会	50	近世の石垣、溝、土坑を検出。影響深度下に中・近世あり。	48
49	2008	兵庫区本町2丁目	神戸市教育委員会	27	中世(15c)～江戸時代の遺構面8面を確認。	49
50	2009	兵庫区北淡洲町2丁目	神戸市教育委員会	210	中世遺構面2面、近世遺構面5面を検出。	50
51	2009	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	45	中世(13c)～幕末の遺構面7面を検出。	51
52	2009	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	160	18世紀～幕末期の遺構面3面を検出。	52
53	2010	兵庫区七瀬町2丁目	神戸市教育委員会	250	中世(14c)～近世(19c)の遺構面10面を検出。	53
54	2011	兵庫区門谷町	神戸市教育委員会	170	中世(15c後)～幕末の遺構面5面を確認。道路検出。	54
55	2011	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	22	中世(15c)～幕末の遺構面4面を検出。	55
56	2011	兵庫区三川口町1丁目	神戸市教育委員会	60	16c～幕末期の遺構面5面を確認。道路検出。	56
57	2012	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	4,640	兵庫城築城期石垣・塀、近世(17c?)～幕末の遺構面4面。	57
58	2012	兵庫区門谷町	神戸市教育委員会	73	中世(15c)～近世(19c)の遺構面4面を検出。	58
59	2013	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	50	中世後期落ち込み・近世の落込み・井戸を検出。	59
60	2013	兵庫区七瀬町2丁目	神戸市教育委員会	80	JR時代中期～幕末の遺構面5面を検出。	60
61	2013	兵庫区兵庫町1丁目	神戸市教育委員会	530	中世(13c～15c)～幕末の遺構面5面を検出。	61
62	2013～14	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	17,000	兵庫城築城期～兵庫動植物の石垣・塀、中世～幕末の遺構面	62
63	2014	兵庫区門谷町4丁目	神戸市教育委員会	70	耕作痕(葉)を検出。	63
64	2014	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	45	弥生時代中期～中期・近世(17c?)～幕末の遺構面6面を検出。	64
65	2015	兵庫区中之島1丁目	神戸市教育委員会	240	近世(17c?)～幕末の遺構面6面を検出。	65
66	2015	兵庫区兵庫町1丁目	神戸市教育委員会	115	近世(17c?)～幕末の遺構面6面を検出。	66
67	2015	兵庫区切戸町	神戸市教育委員会	135	奈良・鎌倉・近世の遺構面5面を検出。	67
68	2015	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	25	近世(18c末～19c初)の遺構面2面を検出。	68
69	2016	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	750	近世遺構面5面、町屋・街路・土坑・井戸・石組遺構検出。	69
70	2016	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	155	近世(16c末～17c)の遺構面7面(火災面2面)を検出。	70
71	2016	兵庫区三川口町1丁目	神戸市教育委員会	200	中世(14c)・中世～近世の遺構面2面を検出。	71

調査の柳原惣門の確認などの調査成果は、現存する最古の絵図である『揖撰八部郡福原庄兵庫津絵図』（元禄9年〔1696〕）との照合から、絵図の精度の高さが実証されてきている。またこれ以降に作成された『兵庫津絵図』（明和6年〔1769〕）、『津中絵図控』（嘉永3年〔1850〕）などの絵図や各町の『水帳絵図』などから、時代と共に変化する、町場の変遷や町割の変化の復元作業も可能となって来ている。

表1 文献

- 1 黒田恭正・山本雅和「三川口町道路」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- 2 藤本史子編『兵庫津道路・御崎本町地点発掘調査報告書』大手前大学史学研究所 2006
- 3 丹治康明「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 4 黒田恭正「兵庫津道路」『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
- 5 山本雅和「平成3年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 6 岡崎正雄・岡田章一・深江英憲編『兵庫津道路I』兵庫県教育委員会 2002
- 7 丸山 蘭・藤井太郎「平成6年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- 8 菅本安明・佐伯二郎「平成7年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- 9 池田 穀「兵庫津道路 第6次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 10 富山直人「兵庫津道路 第7次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 11 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津道路II』兵庫県教育委員会 2004
- 12 岡崎正雄・岡田章一・深江英憲編『兵庫津道路I』兵庫県教育委員会 2002
- 13 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津道路II』兵庫県教育委員会 2004
- 14 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津道路II』『第14・20・21次』神戸市教育委員会 2010
- 15 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津道路II』兵庫県教育委員会 2004
- 16 内藤俊哉「兵庫津道路 第17次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- 17 佐伯二郎「兵庫津道路 第18次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 18 山田清朝・服部 寛「三川口道路」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 19 富山直人「兵庫津道路 第19次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 20 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津道路発掘調査報告書 第14・20・21次』神戸市教育委員会 2010
- 21 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津道路発掘調査報告書 第14・20・21次』神戸市教育委員会 2010
- 22 富山直人「兵庫津道路 第22次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 23 阿部 功「平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2003
- 24 東喜代秀・中居さやか「兵庫津道路 第24次調査」『平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 25 東喜代秀「兵庫津道路 第25次調査」『平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 26 阿部敬生・阿部 功「兵庫津道路 第26次調査」『平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 27 中居さやか「平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004
- 28 内藤俊哉「平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 29 須藤 宏「兵庫津道路 第29次調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 30 須藤 宏「兵庫津道路 第30次調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 31 阿部 功「兵庫津道路 第31次調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005
- 32 楠詰清孝「兵庫津道路 第32次調査」『平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2006
- 33 藤井太郎「兵庫津道路 第33次調査」『平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2007

- 34 須藤 宏「兵庫津遺跡 第34次調査」『平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2007
- 35 内藤俊哉編『兵庫津遺跡 第35次発掘調査概要』神戸市教育委員会 2006
- 36 藤井太郎編『兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書』神戸市教育委員会 2006
- 37 佐伯二郎他「平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧表」『平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2008
- 38 田中一廣『兵庫津38』兵庫津遺跡38次調査会 2006
- 39 阿部 功「兵庫津遺跡 第39次調査」『平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2008
- 40 浅谷誠吾「兵庫津遺跡 第40次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 41 横詰清孝「兵庫津遺跡 第41次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 42 阿部 功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008
- 43 浅谷誠吾「兵庫津遺跡 第43次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 44 中谷 正「兵庫津遺跡 第44次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 45 佐伯二郎編『兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008
- 46 川上厚志「兵庫津遺跡 第46次調査」『平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2010
- 47 富山直人「兵庫津遺跡 第47次調査」『平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2010
- 48 浅谷誠吾「兵庫津遺跡 第48次調査」『平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2010
- 49 阿部 功「兵庫津遺跡 第46次調査」『平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2010
- 50 井尻 格編『兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2010
- 51 石島三和編『兵庫津遺跡 第51次発掘調査報告書一』神戸市教育委員会 2010
- 52 阿部敬生・川上厚志『兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011
- 53 内藤俊哉編『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2012
- 54 富山直人「兵庫津遺跡 第54次調査」『平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2014
- 55 石島三和「兵庫津遺跡 第55次調査」『平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2014
- 56 富山直人「兵庫津遺跡 第56次調査」『平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2014
- 57 川上厚志・井上麻子編『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
- 58 谷 正俊「兵庫津遺跡 第58次調査」『平成24年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2015
- 59 内藤俊哉「兵庫津遺跡 第59次調査」『平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2016
- 60 口野博史「兵庫津遺跡 第60次調査」『平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2016
- 61 池田 犀・阿部敬生・嶺辺文佳「兵庫津遺跡 第61次調査」『平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2016
- 62 斎木 巍・中谷 正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2017
- 63 谷 正俊「兵庫津遺跡 第63次調査」『平成26年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2017
- 64 谷 正俊「兵庫津遺跡 第64次調査」『平成26年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2017
- 65 阿部 功「兵庫津遺跡 第65次調査」『平成27年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2018
- 66 阿部 功「兵庫津遺跡 第66次調査」『平成27年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2018
- 67 石島三和「兵庫津遺跡 第67次調査」『平成27年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2018
- 68 阿部 功「兵庫津遺跡 第68次調査」『平成27年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2018
- 69 本書

註

- (1) 神戸市教育委員会実施分の発掘調査成果については、各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』を参照されたい。
兵庫津遺跡に関する発掘調査報告書は、これまでに下記が刊行されている。
- 岡崎正雄・岡田章一・深江英憲編『兵庫津遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 2002
岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会 2004
田中一廣『兵庫津38』兵庫津遺跡38次調査会 2006
内藤俊哉編『兵庫津遺跡－第35次発掘調査概要－』神戸市教育委員会 2006
藤井太郎編『兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書』神戸市教育委員会 2006
藤本史子編『兵庫津遺跡－御崎本町地点発掘調査報告書－』大手前大学史学研究所 2006
阿部 功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008
佐伯二郎編『兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008
石島三和編『兵庫津遺跡－第51次発掘調査報告書－』神戸市教育委員会 2010
井尻 格編『兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2010
黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次』神戸市教育委員会 2010
阿部敬生・川上厚志編『兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011
内藤俊哉編『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2012
川上厚志・井上麻子編『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
斎木 嶽・中谷 正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2017

参考文献

- 神戸市立博物館編『特別展 上みがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』神戸市立博物館 2004
鈴木康之編『津々浦々をめぐる－中世灘戸内の流通と交通－』兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会 2004
清水靖夫編『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』柏書房 1995
新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 歴史編III 近世』神戸市 1992
林屋民三郎編『兵庫北閘入船納帳』中央公論美術出版 1981
兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 第2巻』兵庫県 1976
兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 第3巻』兵庫県 1978
兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 史料編 古代2』兵庫県 1985
藤田良明『中世における港町兵庫のあゆみ』『歴史と神戸』39-2 神戸史学会 2000
藤本史子・中井淳史編『兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最新成果－』大手前大学史学研究所 2008
歴史資料ネットワーク編『歴史のなかの神戸と平家』神戸新聞総合出版センター 1999

第2章 調査の概要

第1節 調査区の設定と調査方法

今回の調査は、街路築造工事に伴って実施した。北側隣接地が兵庫城跡に関する資料の得られた第57次調査および第62次調査地にあたっており、今回の調査対象地は、兵庫城の南（東）側にあたる地点に位置している。

調査対象部分は、東西方向に延びる幅約10m、長さ80m弱の長方形状を呈する。北端部付近を汚水管が東西方向に貫くかたちで布設されており、人孔も数基設置されている。この部分は遺構面が全て失われていた。またNTTケーブルが調査区中央部を同様に東西方向に貫くかたちで設置されていたことから、上層部分については搅乱を受けていた。また南端部分も、中央部および西部の2ヶ所で旧立体駐車場斜面通路部分のコンクリート基礎が残されており、調査不能であった。このコンクリート基礎については、平成28年6月8日に実施した立会調査の際に、下層への影響状況を確認するために断面調査を実施している。

調査区は前述の、汚水管およびNTTケーブルに付属する人孔によって3地区にほぼ分断されている。このため東側約1/4を東部、中央約2/4を中心部、西側約1/4を西部として、遺構の記録作業および遺物の取り上げ作業を実施した。中央部については、他の調査区よりも範囲が広いため、東半と西半に呼び分けて便宜を図った（図3参照）。

現地における発掘調査は、平成28年8月より開始し、平成28年12月に終了した。発掘調査の実施に際しては、脆弱な地盤と多量の湧水が予想されたため着手前に鋼矢板をほぼ全面に施した。北側の下水道設置部分は鋼矢板を設置できないため、掘削に伴って順次木製の横矢板を設置しながら調査を実施した。

現地表から約1mの深さについては盛土層にあたっており、発掘調査着手前にすきとり作業を実施した。発掘調査着手後、再度重機により遺物包含層上面まで掘削し、以下の土層については人力により掘削および遺構検出作業を行った。

検出した遺構のうち、焼失町屋建物や埋桶遺構など遺構内堆積土層については、土壤を土嚢袋で取り上げたのち、篩い・水選選別作業を行って微細遺物の取り上げを実施した。

また、記録作業の効率化を図るため、4回にわたりドローンによる空中写真測量を実施し、調査区全体を50分の1の平面図化および、炭化材検出状況については20分の1の平面図化を行った。

平成29年1月より出土遺物の整理作業を開始し、あわせて報告書作成作業に着手した。

基本土層

全面調査着手前に安全を考慮し鋼矢板が設置されたことに加え、上層1m分の掘削を事業者側において実施されたため、現地表下以下の詳細な土層断面図は作成できていない。しかし、調査前の水道管埋設状況確認のための立会調査において土層断面図の略図が作成されているため、その図を参考にして述べると、表層のアスファルト、盛土層・整地層や戦災時の焼土層などの土層が厚さ1.25m程度堆積しており、その下層に江戸時代頃の遺物を含む土層が存在する。調査開始時に改めて重機により、この遺物包含層の上面まで掘削した。以下基本的に人力により掘り下げおよび遺構の調査を実施した。

今回の調査では、5面の遺構面を確認した。地区ごとの各遺構面の検出位置については、図4に示した。以下、各遺構面ごとに主な遺構を中心に記述する。

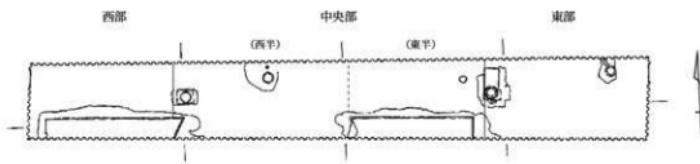


図3 調査区割図

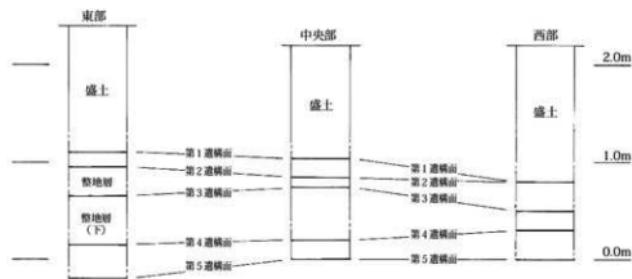
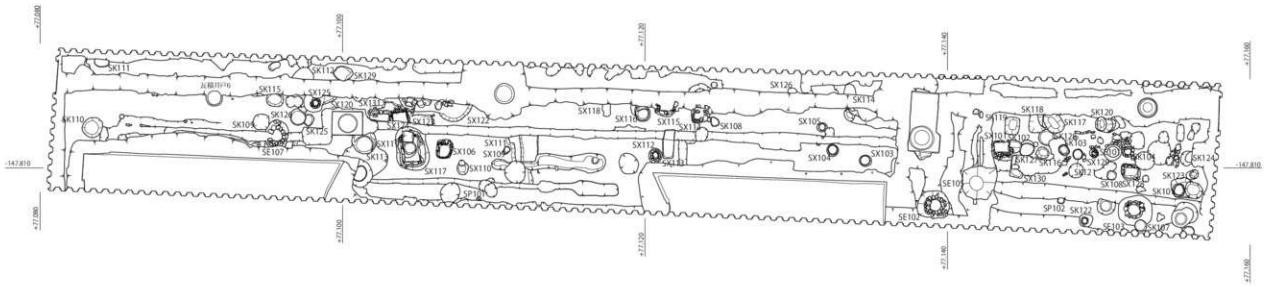


図4 土層断面模式図



図5 調査地位置図

[第1 遺構面]



〔第2遺構面〕

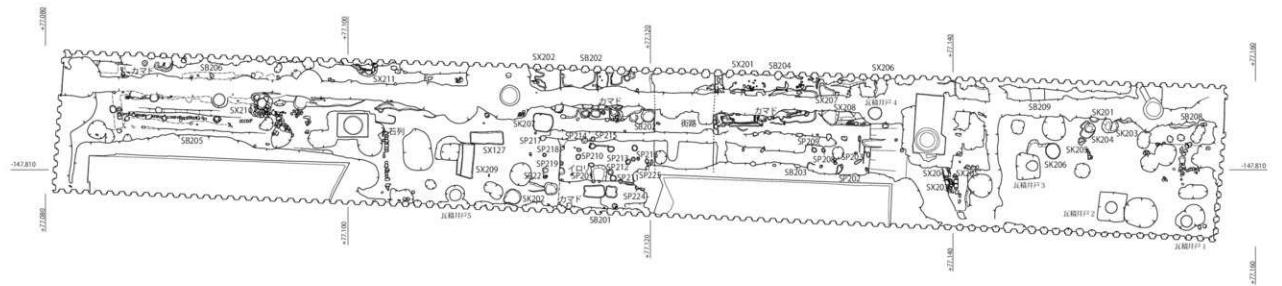
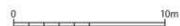


図6 第1・2遺構面平面図



第2節 第1遺構面

東部ではT.P. 1.0～1.2m、西端部で同0.8m前後で第1遺構面を検出した。東から西へと下がる地形となっているが、特に西部は後世の削平によるものかかなり低くなっている。第1遺構面に相当する遺構と第2遺構面に伴う遺構を同一面で確認した。

検出した遺構は、土坑29基、井戸5基、埋桶遺構3基、胞衣壺埋納遺構1基、性格不明遺構などである。検出した遺構の時期については、18世紀後半～幕末頃と考えている。

(1) 東部

井戸

東部では4基検出した。石積井戸2基、木製の井戸枠をもつもの1基、井戸枠の素材が不明なものが1基である。

S E 101

東部東端で検出した。掘形の規模は、1.1×1.0mを測り、平面形は円形である。底部付近で井戸枠の痕跡がわずかに遺存していた。径80cmを測る木製の環状の井戸枠を設置していたものと考えられる。深さは25cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、銭貨、骨が出土している。

S E 102

東部西端で検出した石積みの井戸で、T.P. 約0.85mで検出した。掘形の規模は2.1×1.85mを測り、平面形は梢円形に近い。石積みの内径は75cm程度を測る。石積みに使用されていた石は、下部ほど大型の石材が使用されていた。掘形内や石積み内から土師器、陶器等の遺物が出土している。石積み内の下層、T.P.-0.4mで2枚の板材（いずれもスギ材、残存値：幅20.0cm、長さ60.2cm、厚さ1.7cm、同：幅6.2cm、長さ45.3cm、厚さ0.9cm）が水平に重なった状態で出土した。これらの板材は製品ではなく、性格も不明である。湧水のためT.P.-0.5mまで掘削不能となり、完掘はできていない。掘形内および石組み内から土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、土製品、銭貨、銅製品、漆製品が出土している。

S E 103

東部東半南端で検出した石積みの井戸で、T.P. 1.0m前後で検出した。南東側をS K107によって切られていたほか、北部を搅乱によって削平されている。

掘形の平面形は方形に近い不定形で、長径2.22m、短径2.02mを測る。

石積みの内径は約75cmを測る。湧水のためT.P.-0.75mで掘削不能となり、完掘はできていない。SK107に切られている。掘形内および石積み内から土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、土人形、銭貨、貝が出土している。

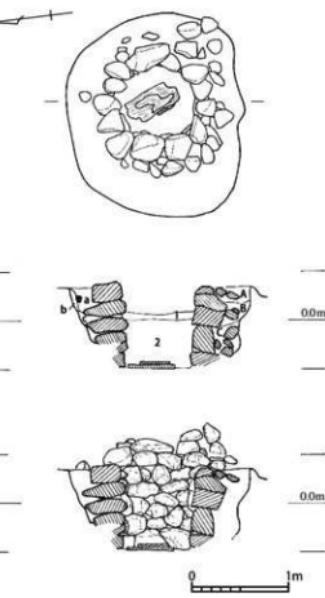


図7 S E 102平・断面図

- 1 噴灰色小礫混じり粘質土
- 2 淡灰(黄)色細砂～小礫
- a 灰黄色小礫混じり砂質土
- b 淡灰色粘質土
- c 淡灰黄色小礫混じり砂質土
- A 灰(黄)色小礫混じり粘質土
- B 灰色粘質土(淡灰黄色粘土含む)
- C 淡灰色粘質土

石組造構・石積造構

S K 104

東部東半で検出した。上部は2ないし3段に石を円形に積んでいるが、下部には石積みはみられない。また、石積み部分には、石に加えて瓦も差し込まれるかたちで施されていた。掘形は、平面形が円形を呈し、 $0.76 \times 0.73\text{m}$ を測る。石積みの内径は、径 $40 \times 50\text{cm}$ を測る。深さは48cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品、貝、骨、鱗などが出土している。

S K 122

東部中央南端で検出した。掘形の平面形は円形を呈し、 $0.88 \times 0.82\text{m}$ を測る。底部付近のT.P. 0.60m付近で円形に巡る石囲いを検出した。石囲いの内径は、 $34 \times 29\text{cm}$ を測る。深さ61cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品が出土している。

S K 123

東部東端で検出した。上部をS K 101や攪乱坑によって切られているため、本来の規模や形状が不明な部分がある。掘形の規模は、長径は約2.0mと推定され、短径は1.33mを測る。内部で石積みを確認しており、井戸状を呈するが、石で囲まれた範囲は直径45cm前後を測り、井戸としてはかなり小型と言わざるを得ない。T.P. 0mまで掘削したが湧水のため完掘は行えていない。確認できた深さは、107cmを測る。掘形内および石積み内から、土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。



図8 S K 104・S K 122平・断面図



写真3 S K 122下部石組み検出状況（西から）

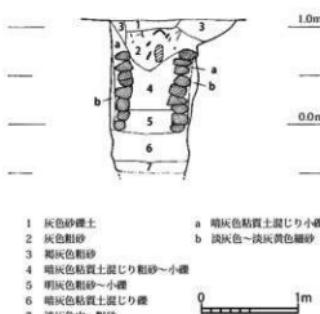


図9 S K 123平・断面図

S X 101

東部西半で検出した。上部は石で囲んでいるが、下部は木製の枠で四角く囲っている。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、銭貨、銅製品、鉄製品、骨などが出土している。

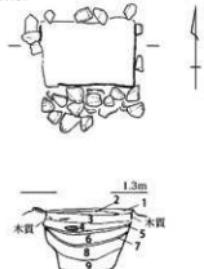
S X 128

東部東半で検出した石組造構である。ただし、石組みが明確に確認できたのは、北辺と西辺の2/3程度のみで、南西隅から南辺の大半は石組みがみられない。南東隅は上部のみ2石が残存していたが、それ以外は石が遺存していない。東辺は南東隅を除き、棟瓦を3枚用いてほぼ垂直に施し、石組みの代わりに内壁面を保護しているように見受けられる。石組みや瓦で子込まれた範囲は、 $0.94m \times 0.75m$ を測り、掘形の規模は、 $1.26m \times 1.06m$ を測る。掘形の平面形は、ややいびつな隅丸方形形状を呈する。深さは30cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、銅製品、貝、骨などが出土している。

S X 129

東部東半で検出した石組造構である。 $0.57m \times 0.55m$ を測り、平面形は、円形である。深さは、60cmを測る。石組み内の規模は、径22cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X 101



1 灰色砂礫土

2 黄灰色砂礫土

3 淡灰黄色砂混じり粘質土

4 淡灰黄色粘土

5 暗灰色粘土

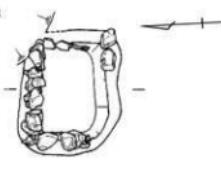
6 淡黄色砂礫

7 暗灰色粘土

8 淡灰黄色砂混じり粘質土

9 暗黄色砂質土

S X 128



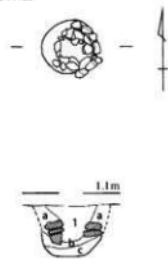
1 暗灰色砂礫土

2 灰色粘質土(腐泥じる)

a 暗灰色土(腐泥じる)

b 灰黄色砂質土

S X 129



1 暗灰色砂混じり土

a 暗灰色土

b 暗灰色土～粗砂混じり粘質土

c 黄色砂質土

図10 S X 101・S X 128・S X 129平・断面図



写真4 S X 123石組み内下層断面(東から)



写真5 S X 128掘形断面(西から)

埋桶遺構

SK101

東部東端で検出した。掘形の平面形は円形を呈し、径 $0.86 \times 0.8m$ を測る。内部で内径 $61cm$ を測る木質の痕跡を確認している。おそらく桶を設置していたものと考えられる。深さ $44cm$ を測る。土師器、磁器、瓦、土製品、骨が出土している。

SK103

東部西半で検出した。西側の上部を擾乱によって切られている。長径 $0.77m$ 、短径 $0.65m$ を測り、平面形が橢円形を呈する掘形の内部で、径 $54cm$ を測る炭化した円形プランを確認した。木質部分は遺存していないが、本来桶が設置されていたものと考えられる。深さ $37cm$ を測る。土師器、陶器、磁器、瓦、錢貨、キセル、銅製品、鉄製品、骨などが出土している。

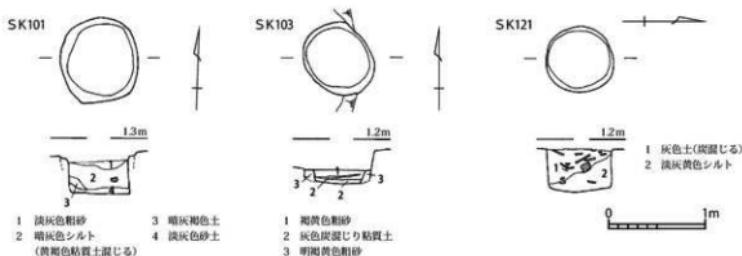


図11 SK101・SK103・SK121平・断面図

SK121

東部中央で検出した。掘形の平面形は円形を呈し、 $0.7 \times 0.66m$ を測る。下部に内径 $65cm$ を測る桶状の木製品を設置している。深さ $45cm$ を測る。

土師器、陶器、磁器、瓦、銅製品、鉄製品、貝、骨などが出土地していいる。

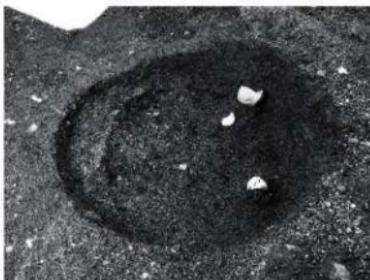


写真6 SK103遺物出土状況（南から）



写真7 SK121断面（東から）



写真8 SK121桶内完掘状況（東から）

(2) 中央部

中央部では、石組遺構、埋桶遺構、土坑などの遺構を検出した。

石組遺構

S X 106

中央部西半で検出した内法0.8×0.7m、深さ60cmを測る長方形の石組遺構で、径10～20cmの自然石を4～5段積んでいる。石積みは長手方向に使用するもの、小口方向に使用するものがあり、一定していない。東西1.2m、南北1.3mを測り、平面形が長方形を呈する掘形をもつ。底面は、素掘りのままである。土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤、飯事道具、錢貨、銅製品（キセル等）、鉄製品などが出土している。

S X 112

中央部東半で検出した内法径40cm、深さ40cmを測る、小型の円形石組遺構である。検出面から3段ほどは、石組が確認できるが、以下は素掘りである。土師器、磁器、瓦などが出土している。

S X 114

中央部東半で検出した石組遺構で、平面形は長方形を呈するが、北側を搅乱によって削平されている。土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤、錢貨、銅製品（キセル等）が出土している。

S X 115

中央部東半で検出した、東西40cm、南北20cm以上、深さ40cmの方形石組遺構である。北側を搅乱によって削平されている。土師器、陶器、磁器、土鍤、土人形、硯が出土している。

S X 117

中央部西半で検出した、東西2.14m、南北2.9m、深さ45cmを測る、平面形が長方形を呈する石組遺構である。中央部に径80cmの円い井戸状の木枠が貫く。土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤、飯事道具などが出土している。

S X 124

中央部西半で検出した、方形の石組遺構である。南側を搅乱によって削平されている。土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤、土人形、銅製品などが出土している。

S X 131

中央部西端で検出した。北側の掘形を搅乱によって削平されている。北辺のみに石組みがみられる。土師器、陶器、磁器、砾石が出土している。



写真9 S X 106石組み内断面（南から）



写真10 S X 112石組み内断面（北から）

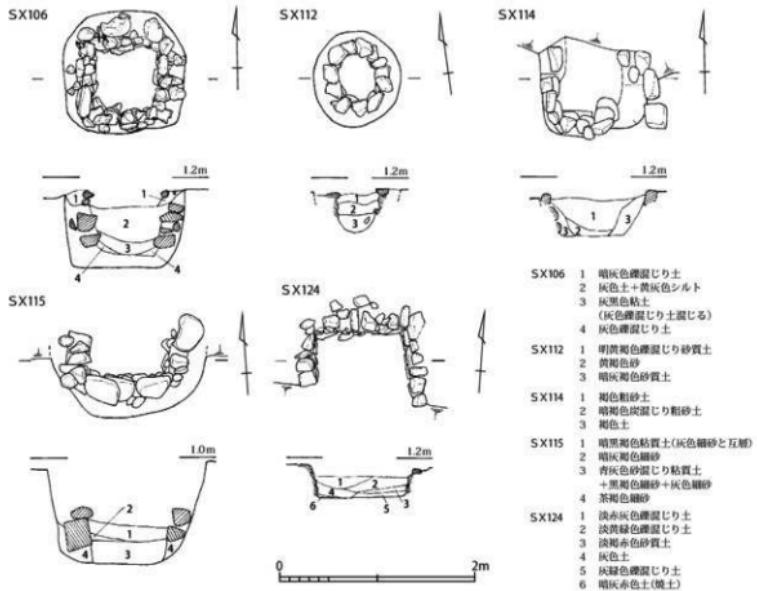


図12 SX106・SX112・SX114・SX115・SX124平・断面図

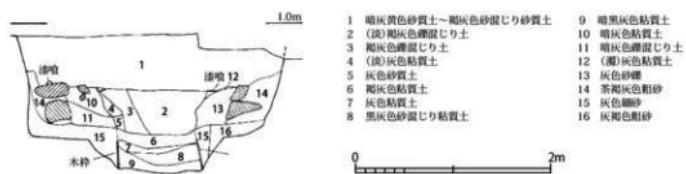


図13 SX117平・断面図



写真11 SX117石組み内上層断面（東から）



写真12 SX117掘形断面（東から）

埋桶遺構

中央部東端付近で、近接した状態で3基の埋桶遺構を検出した。

S X 103

径0.85mを測る平面円形の掘形内に、径61cm、高さ17cmを測る桶が遺存していた。桶は、幅10cm前後の板を6枚使用して底板とし、幅7~12cmの板を立てて作りあげている。桶内からは陶器や磁器、銭貨などが出土したほか、土壤選別作業により、種子、炭、玉、骨、鱗を確認している。

S X 104・S X 105

S X 104は径0.8mを測る掘形内に、径64cmの桶の痕跡を検出している。S X 105はS X 103・104よりもやや小型で、0.69×0.6mを測る掘形の中に径42cmの桶の痕跡が残る。ともに、土師器、陶器、磁器、瓦、銅製品、貝、骨、齒、鱗などが出土している。



図14 S X 103・S X 104・S X 105平・断面図



写真13 S X 103桶内断面（南から）



写真14 S X 103遺物出土状況（南から）



写真15 S X 104桶内断面（南から）



写真16 S X 105桶内完掘状況（南から）

伏甕遺構

S X 109

東部西半で検出した。径35cmを測る平面形が円形を呈する掘形をもつ、伏甕遺構である。掘形いっぱいに陶器製の甕を倒立させて据えている。北東側半分をSK111によって削平されている。

町屋遺構に伴う排水施設と考えられるが、水琴窟のように掘形の底部や甕の内部に特別な加工はみられない。排水の一時的な貯水機能をもつ遺構であろう。

検出状況から判断すれば、当遺構が機能していた時期に対応する面は、第1遺構面よりも上位に位置していたものと考えられる。

胞衣壺埋納遺構

S P 101

中央部西半で検出した。南側は鋼矢板設置時の搅乱により削平されている。径32cmを測る平面形が円形を呈する掘形内で土師器の壺が横倒しの状態で出土している。本来は掘形内に正位置に近い状態で据え置かれていたものと考えられる。兵庫津遺跡においては各調査地点で同様の遺構が検出されている。土器内に納められたと考えられる胞衣や筆・墨など添え物と考えられる共伴遺物は遺存していないが、建物跡の土間部や出入口周辺で検出されることが多いことなどから、胞衣壺の可能性が高いと考えられている。S P 101も同様の構造をもつことから、胞衣壺埋納遺構と考えられる。

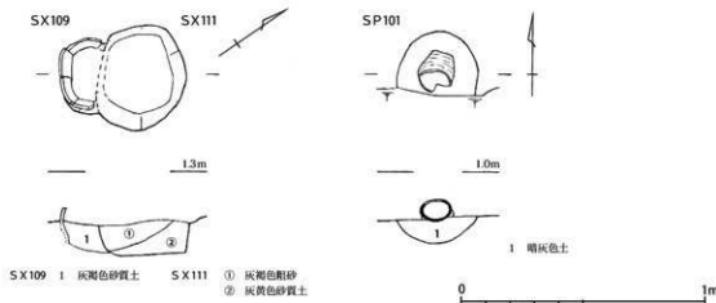


図15 S X 109・S X 111・S P 101平・断面図



写真17 S X 109遺物出土状況（北東から）



写真18 S P 101胞衣壺検出状況（北から）

土坑

S K113

中央部西端で検出した。径1.5m、深さ50cmを測る土坑である。北側を搅乱によって削平されているが、本来の平面形は円形を呈するものと考えられる。埋土は、上層より大きくなれば砂、焼土、底部の粘質土層の3つに分かれれる。底部の粘質土層が一段深くほぼ正円形に堆積している状況から桶などが埋められていた可能性もある。それぞれの層位から、土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、銅製品、鉄製品、貝、骨、鱗などの遺物が出土しており、焼土からは、錢貨も出土している。

S X113

中央部の中ほどで検出した、幅70cm、長さ1.8m、深さ20cmを測り、平面形が長方形を呈する土坑である。北辺は肩部を残し50cm程度搅乱によって削平されている。底面は平らで、埋土の下層には、焼土が含まれる。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、土人形、飯事道具、箱庭道具、鉄製品、貝などが出土している。

S X119

中央部西半で検出した、東西70cm、南北70cm以上、深さ20cmを測り、平面形が長方形を呈すると考えられる土坑である。北側を搅乱によって削平される。埋土は粗砂層で、下層には焼土が含まれる。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐などが出土している。

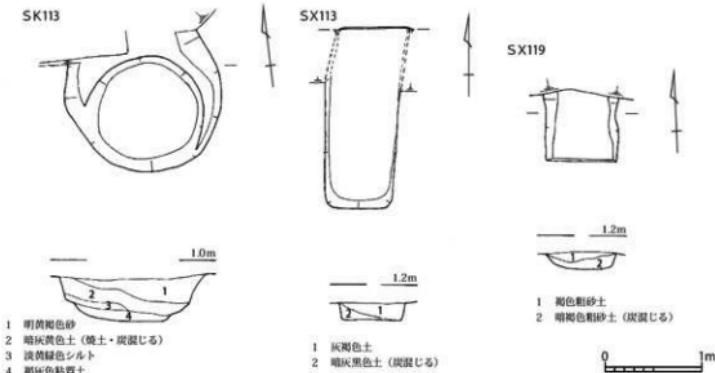


図16 SK113・SX113・SX119平・断面図



写真19 SK113断面（北東から）



写真20 SX119断面（北から）

(3) 西部

井戸

S E 107

西部東半で検出した石積みの井戸で、 $1.45 \times 1.75\text{m}$ 以上を測る、平面形が椭円形の掘形をもつ。径 $10 \sim 30\text{cm}$ 大の自然石の石組みの内部に径 40cm の木枠の痕跡が認められる。中央の上部と南側を擾乱によって削平されている。土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品が出土している。

石組構造

石組構造については、先述の井戸との関連および区別を考慮する必要があるが、井戸としたものに比して規模の小さいものが多いこと、底部に井筒などの水溜めの施設がみられず、また石組みや掘形が湧水層（あくまで現在の）まで到達していないものが多いことなどから、現時点では井戸あるいは水溜め等の用途は想定しにくいものと考えられる。

S K 112

西部東半で検出した、東西 1.4m 、南北 0.7m 以上を測る土坑である。南半分を擾乱によって削平されている。埋土の上層は、粗砂層で、径 $20 \sim 50\text{cm}$ 大の石が多くみられる。西側には、掘形状の堆積が認められる。削平された石組構造の可能性がある。土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品、貝が出土している。

S X 125

西部東半で検出した石組構造で、東西 1.3m 、南北 1.1m 以上の掘形の内部に、内法東西 40cm 、南北 50cm のやや丸みをもつ長方形の石組みが築かれる。使用されていた石材は自然石で、10段以上積まれている。土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤、飯事道具、錢貨、銅製品、骨が出土している。

土坑

土坑は約30基確認している。またこの他に、性格不明構造としたものも30基程度確認している。

S K 110

西部東端で検出した、径 1.4m を測り、平面形が円形を呈する土坑である。周囲の 20cm ほどが深さ 50cm 程度で掘形状の堆積をしめし、中央の径 1.0m の部分が、深さ 1.0m まで掘込まれている。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S K 115

西部東半で検出した、東西 1.1m 、南北 1.1m 、深さ 30cm を測る、平面形が椭円形を呈する土坑である。断面形は楕円形の形状で、埋土は砂および粗砂である。土師器、陶器、磁器、瓦、貝が出土している。



写真21 S E 107石組み内断面（南から）



写真22 S K 110井戸枠？内断面（南から）

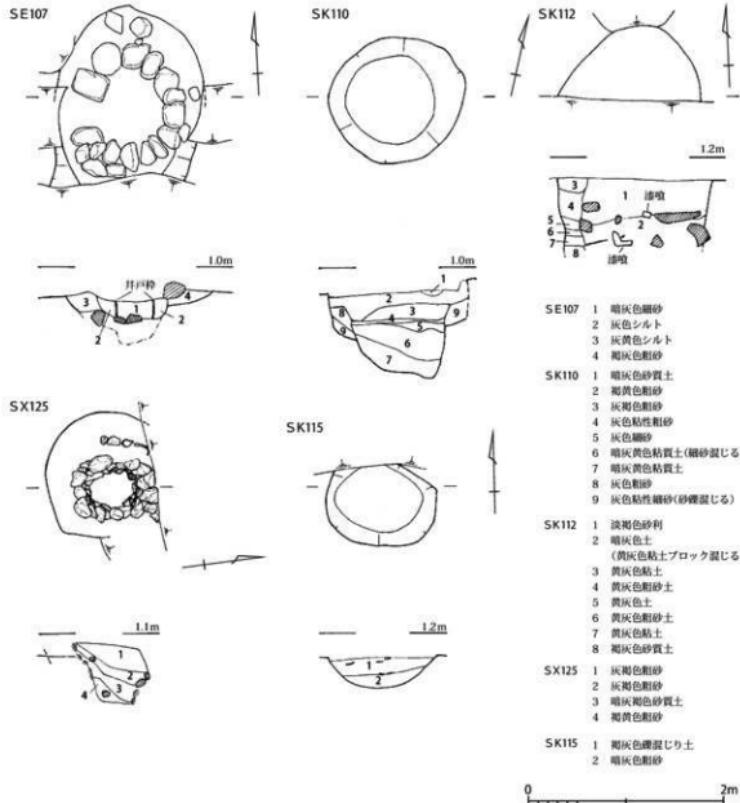


図17 SE107・SK110・SK112・SX125・SK115平・断面図



写真23 SX125石組み内断面(東から)



写真24 SK115断面(北から)

第3節 第2遭構面

火災にあった町屋のほか、街路、土坑、石組み遭構、溝状遭構などの遭構を検出した。時期的には、18世紀の前半頃と考えている。東部では、T.P. 0.9~1.0mで、中央部や西部では、T.P. 0.8m 前後で遭構面を検出した。

(1) 東部

東部では、町屋遭構、土坑、石組み遭構などを検出した。

町屋建物

S B208

東部東端で検出したが、北側が下水道設置の掘形によって失われているほか搅乱の影響を受けていることもあり全体の形状、規模は不明である。土間を東西約4.4m分を検出しており、東西棟の建物と考えられる。

床部分には焼土が堆積していた。そのほか北側部分は地崩れによって一段ないし数段程度段落ちして低くなっているが、この低くなった部分において焼土の堆積が遺存していた。この低くなった部分の内部にはピット状に壅んでいるところがあり、この部分については、本来礎石が存在し、その礎石が整地の際に抜き取られた痕跡と考えられ、その壅みに焼土が堆積したものと考えられる。

上面の焼土層や土間等から、土師器、陶器、磁器、瓦、土人形、銅製品、鉄製品、貝が出士している。

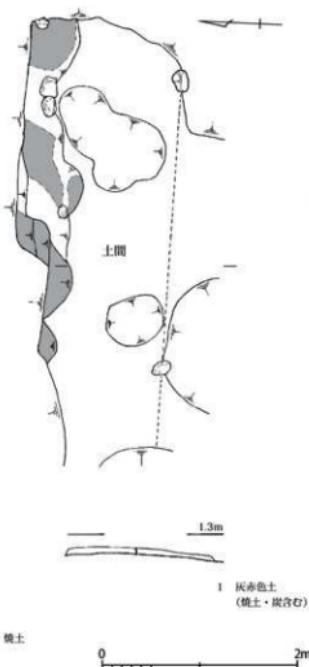


図18 S B208平・断面図



写真25 S B208焼土断面（東から）



写真26 S B209土間検出状況（南から）

S B209

東部北端で検出した。南側は下水道設置掘形によって失われており全体の形状、規模は不明である。イロリ跡と考えられる痕跡を確認している。礎石等が遺存しておらず、東西棟か南北棟かは断定が難しい。北側に位置する第62次調査区との間には約10mの未調査部分があり、どちらの方向でも支障はないようである。『新在家町水帳絵図』には南北方向の屋地割りがみられる（巻頭図版6）。土師器、陶器、磁器、瓦、銅製品、貝が出土している。

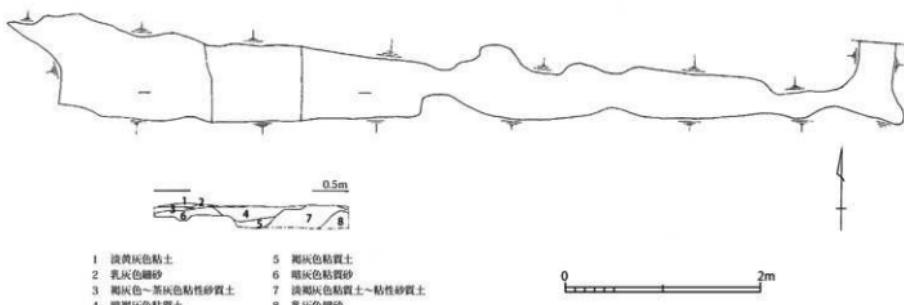


図19 S B209平・断面図

石組遺構

S X203・S X204

S X203～205は東部西端で検出した。S X203・204はともに現状で半円形状に石積みがめぐる形状を呈し、南北に並んでいる。後述のS B203の裏手側の斜面が下がりきり、いったん平坦地となった部分のすぐ東側に位置するが、本来は半円形を呈していたのか円形に巡っていたものが、後世の搅乱・削平等により一部失われたために現状のような形を呈しているのかは判然としなかった。詳細にみれば、S X203の石組みは半円形状であるが、S X204はやや歪な感はある。

また、後述するS X205とあわせて、各遺構それに伴う掘形は確認されなかった。

S X203は、石積みの内法は60cmを測る。深さは40cmを測る。

S X204は、石積みが半周していないが、想定する内法は40cmを測る。深さは35cmを測る。



写真27 S X203石組み内断面（西から）

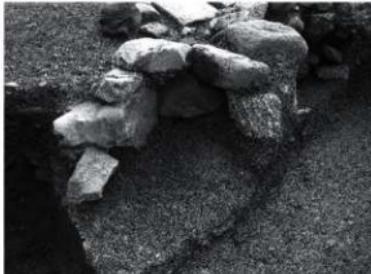


写真28 S X204石組み内完掘状況（北西から）

S X 205

S X 203のすぐ東側で、S X 203に沿うようなかたちで検出した、石敷きの遺構である。一石五輪塔の火水地輪1基を寝かせたかたちで設置したものと、五輪塔の火輪3基を倒立させて下面の平らな面を上面にみせるもの、さらに足らないところは通常の礫で補ってほぼ一直線状に並べている状況が窺われる。火輪は、微妙な大きさの違いはある、大きくみればほぼ同規模のものを用いていると考えてよいものと思われる。南側は東側に1石分ずらせて、礫を2石、やや間隔を空けて南北に並べている。

S X 205のみ単独で通路状の遺構として捉えることも可能かもしれないが、石と石の間にわずかに隙間がある部分があることや、一直線状といいながらも、微妙にずれているようにもみえることをどう捉えるのか、判断に迷う面も多い。先述したように、S X 203～S X 205について個々に掘形を伴っているようにはみえず、これらの遺構は一連のものと考えができるのであれば、階段状の遺構として考えることも可能かもしれない。S X 203・204の底面には石を敷いていないため、總体として階段や通路としての機能を認めうることも可能かもしれない。いずれにしても断定要素に乏しく、現段階では性格については保留とし、今後も類例の調査に努めたい。

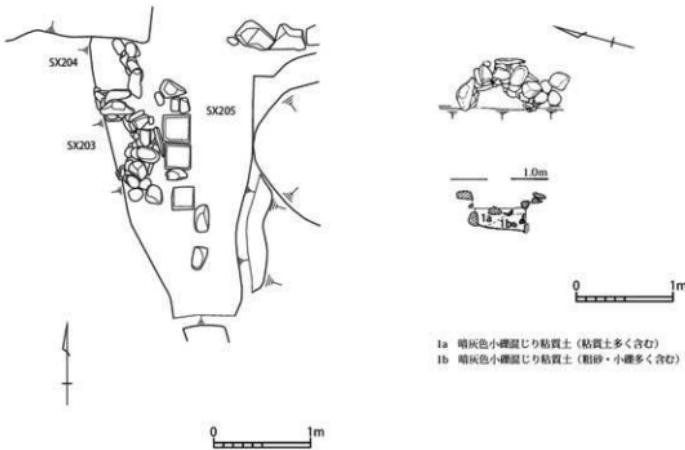


図20 S X 203～S X 205平面図

図21 S X 203平・断面図

土坑

東部で4基検出した。

S K 206

東部で検出した平面形が円形を呈するもので、径 1.05×0.97 m、深さ16cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

(2) 中央部

焼土層

焼土層は、調査区の東部から中央部にかけて検出したが、中でも中央部周辺で良好な堆積が認められた。

堆積状況は、焼土面の直上に火災に遭った際、焼け崩れた炭化物の堆積がみられ、その上に焼けた壁土や炭化材などを含む土が敷き均されている。

出土遺物は、

街路

調査区中央で幅約4.2mを測る、南北方向の街路を検出した。断面観察では、この街路は複数の土層を版築状に積み上げるようにして造り上げている。この街路は、第62次調査地より続くもので、『揖州八部郡福原庄兵庫津絵図』(元禄9年 [1696]、以下『元禄絵図』と呼称) や『新在家町水帳絵図』(天保9年 [1838]) にも記載されている街路と考えられる。絵図にも見られるように、この街路を挟んで、東西方向に延びる町屋の区画を検出した。

町屋建物

S B201

中央部西半で検出した。S B201は焼失した状況を最もよく確認できる町屋跡である。乳灰色系の細砂層からなる整地層を除去すると火災によって焼失した家屋部分に炭化材や焼土の広がりを検出した。この段階でも壁材あるいは屋根材を構成していたと考えられる木材が炭化している状態で見られたが、焼土を除去するとさらに個々の単位、木舞などの組み合わさった状態や、径の大きい木材などが比較的明確な状態で検出された。さらにこの炭化材等を除去し焼失した段階の床面を確認した。

S B201の間口部分は、南側が調査区外に延び、また北端は搅乱によって失われているため本来の規模は不明である。確認できた規模は約5mを測る。建物部分の奥行きは約8mを測る。建物内部で、イロリやカマドを検出している。建物の奥の敷地部分は、長さ約11.5mを測り、この部分に先述のS X127や後述のS X209などが存在する。中央部西端部で南北方向の石列を長さ約4mにわたって検出しており、この石列がS B201の敷地の西端部であり、後述するS B205との境界ラインにあたっていると考えられる。

S B202

S B201の北側に位置する町屋で、北側は調査区外に延びるため正確な規模は不明である。確認できた間口部分の規模は、約4mを測る。奥行きはS B201同様に8m程度と考えられる。内部で何らかの用途に使用した火床を検出しているが、S B201のイロリと比して小規模であることから、イロリと断定することは困難で、現段階では火床と呼称する。カマドは複数の焚口を北側にもつものを複数確認している。造り替えが複数回行われたことが考えられる。また径1~数cmの玉石の集石がある。流しの痕跡と考えられる。

S B203

S B203・204は街路を挟んで、S B201、202と向き合うかたちで検出した。

S B203もS B201同様に炭化材の検出が顕著であった。S B203の裏手(東)側は斜面地となっており、東部西端に向かって長さ2.5mの範囲が約50cm下がる地形となっている。この斜面上で焼け落ちた壁材が倒れ込んだ状態で検出し、壁材である木舞の一部を明瞭なかたちで検出した。

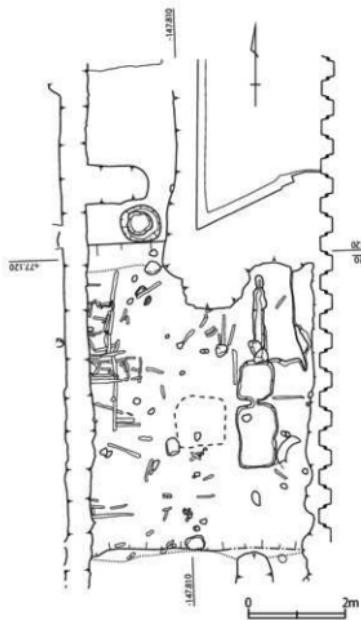


図22 SB201炭化材検出状況平面図



写真29 SB201壁材検出状況（西から）



写真30 SB201・SB205屋地背割り石列全景
(東から)

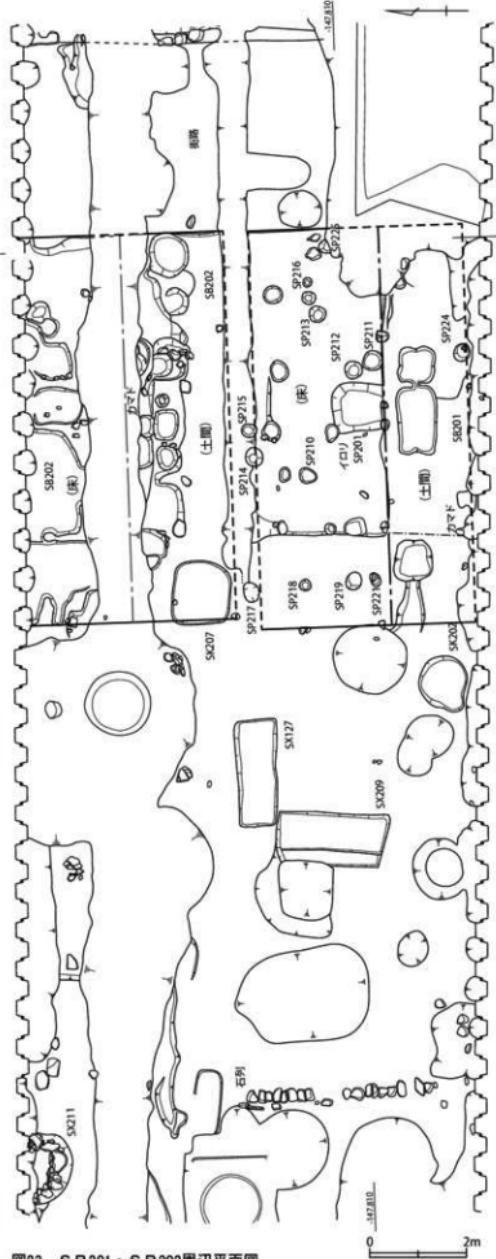


図23 SB201・SB202周辺平面図

S B204

S B203の北側で検出された。イロリやカマドも検出している。カマドはS B202と同様に複数回造り直されているようである。

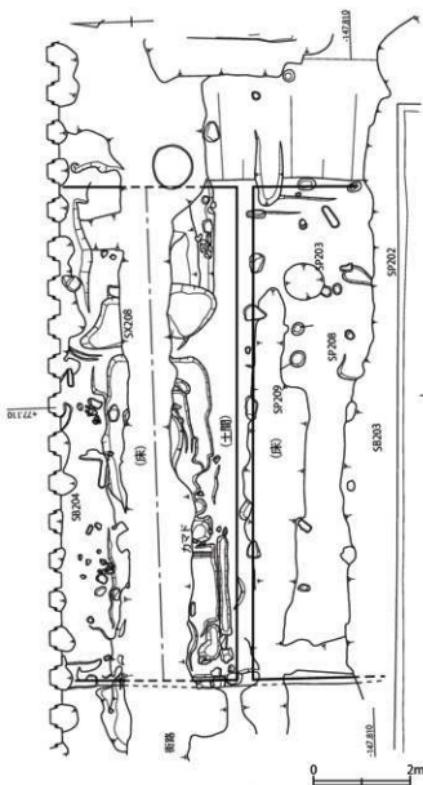


図24 S B203・S B204平面図

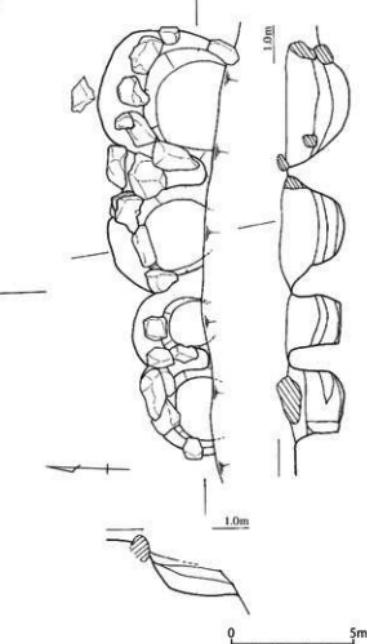


図25 S B204カマド①平・断面図



写真31 S B202カマド①断面（西から）



写真32 S B204カマド①全景（北から）

性格不明遺構

性格（用途）の不明な遺構の中で、S X127・S X209は中央部西半で検出した。

S X127

中央部西半で検出した。幅0.8m、長さ2.3mを測る長櫛状の木枠を石列の上に設置する木組遺構である。内部からは土師器、陶器、磁器、土錘、銭貨、キセルなどの銅製品等がまとまって出土したほか、木枠を留めていた鉄釘も多く出土している。S B201の建物裏手に位置する場所で検出しており、関連が考えられるが詳細は不明である。土師器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦、土錘、土人形、飯事道具、銭貨、キセル、銅製品、鉄釘、貝、骨、石製品、漆製品が出土している。

S X209

検出状況や鉄釘の存在などから、先述のS X127と同様に長櫛状の木製の木枠を設置していた施設と考えられる。S X127検出面よりもやや削り込んだ層位で検出したが、位置的にもS X127の南側で、L字状に接するかたちで検出していることなどからS X127と同時期である可能性が高いものと考えられる。土師器、陶器、磁器、瓦、土錘、銭貨、キセル、鉄釘が出土している。

石組遺構

S X211

中央部西端で検出した。北側は調査区外に延びている。石組み内部の形状は方形ないし長方形を指向しているようであるが、鋼矢板設置時の搅乱によって一部が崩れている。残存している規模は、掘形は長径1.5m、短径0.8m、石組みの内径は、長径0.8m、短径0.4mを測る。深さ46cmを測る。陶器、磁器、瓦、骨が出土している。

土坑

中央部では、土坑を3基検出した。いずれも不整形で浅い。

S X207

中央部東半で検出した土坑で、東西1.0m、南北1.0m、深さ20cmを測る。南半分を搅乱によって削平されている。土師器、陶器、磁器、瓦、土錘、銭貨、銅製品が出土している。

埋桶遺構

S X208

中央部東半で検出した。北側が下水管布設の際の掘形により失われている。またこの搅乱のためかは不明であるが、北半部は陥没によって段落ちし、10cm程度低くなっている。内部で検出した桶については、上部は火を受けて炭化して遺存しているが、下部は遺存していない。以上のことがらから想定されることは、近接するS B203・S B204とともに火災に遭った時点での桶の上部が開口していたために、この部分は火災により焼けて炭化したが、埋まっていた（桶内部に堆積物が存在した）ために下部は火を受けず、炭化もしなかったことが考えられる。桶の上部は炭化したことにより木質部分が残り、桶が焼けなかつことにより下部は腐食が進み、木質部分が遺存しなかつたと考えられる。掘形の規模は1.15×1.0m以上を測り、桶は径約80cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、土錘、土製品、銭貨、キセル、骨が出土している。



写真33 S X208桶内断面（西から）

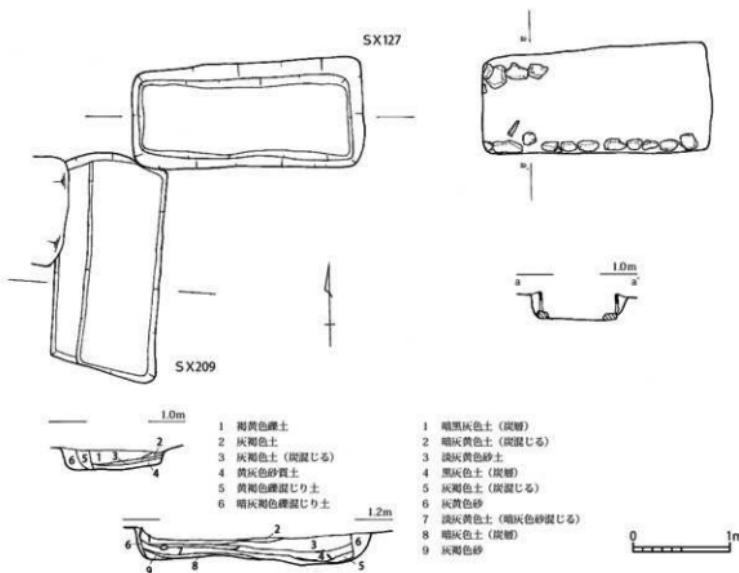


図26 SX127・SX209平・断面図

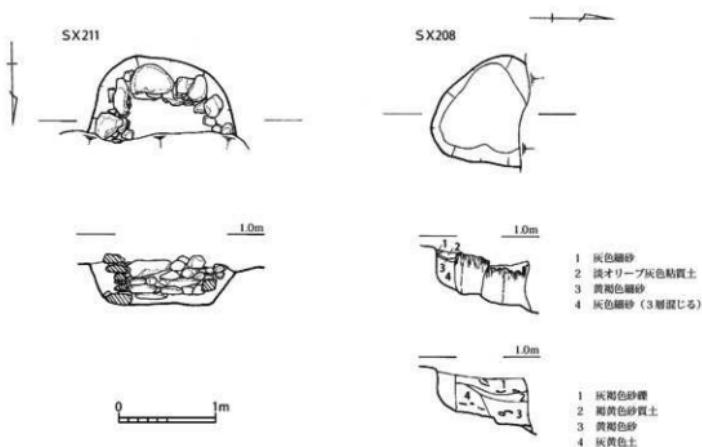


図27 SX211・SX208平・断面図

(3) 西部

町屋建物

西部では、S B205・206を検出した。S B201・202との間の敷地境界は中央部西端で検出した石列によってほぼ確定できるものと考えられるが、この部分に街路は存在しないようである。つまり S B205・206は西側に間口をもつ町屋と考えられる。

S B205

土間および床面の一部を確認したが、攪乱によって南側が大きく失われているなどの影響が受けしており、建物部分について確認できた規模は、間口部分約3m、奥行き約9mである。イロリやカマドを検出している。上面整地層から、土師器、陶器、磁器、土錘などが出土している。

S B206

攪乱の影響や、大半が調査区外に伸びると考えられることなどから、本来の規模は不明である。間口部分は約1mを検出できたにすぎない。建物部分の奥行きは、現段階では、S B205とほぼ同じと考えている。イロリやカマドは調査区内で検出できていない。

また、各町屋建物の床面付近で、礎石抜き取り痕と考えられるピットも確認している。調査区北部、汚水管布設部分の両側、特に北側は全面的に地ずれの痕が顕著に確認され、調査区中央ないし南側よりも下がった（低い）位置で各遺構を検出している。

石組造構

S X210

西部東端で検出した。東西1.5m、南北0.8mを測る掘形をもつ。北側半分を攪乱によって削平される。西辺が崩れているものの、内法は東西70cm、南北60cm以上の方形と考えられる。

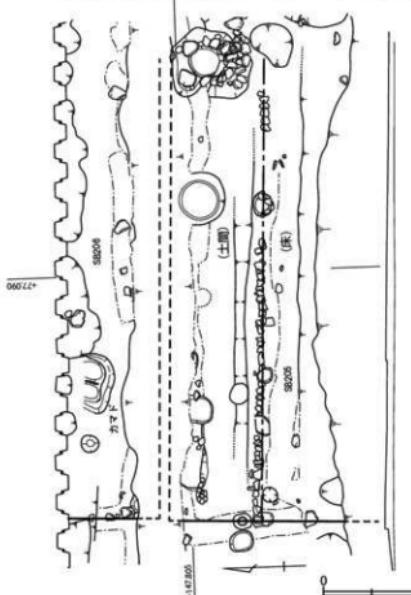


図28 S B205・S B206周辺平面図

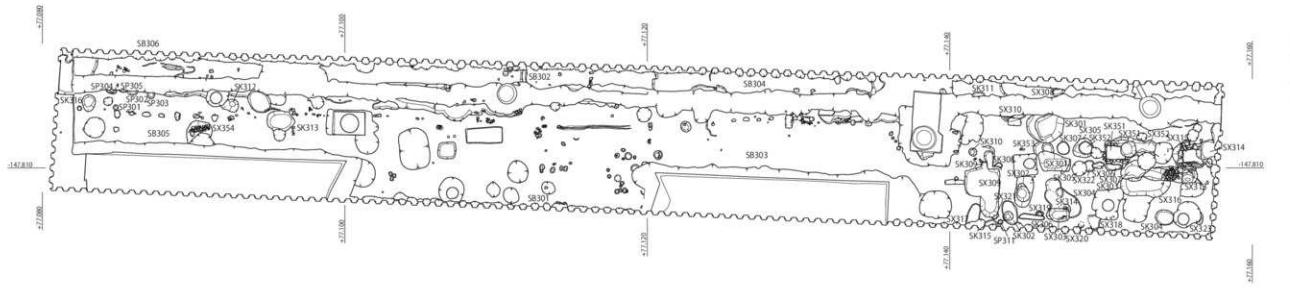


写真34 S B205イロリ断面（東から）



写真35 S X210石組み内断面（東から）

〔第3遺構面〕



[第4遺構面]

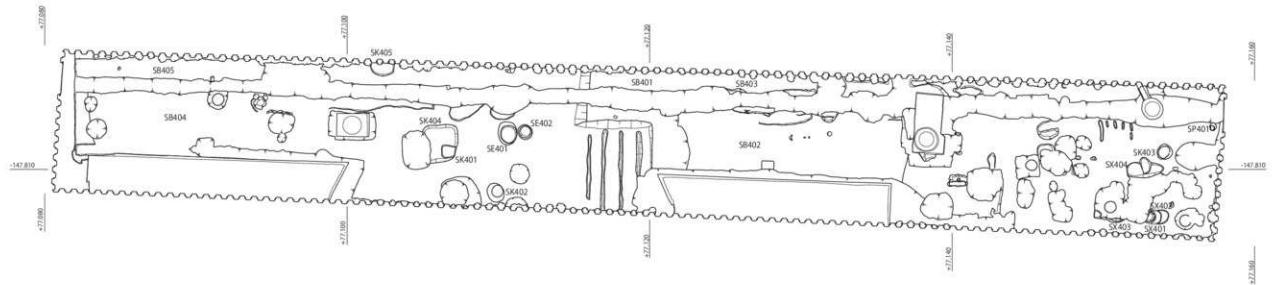


図29 第3・4遺構面平面図



第4節 第3遺構面

後述する第4遺構面上に30~70cm近く細砂層を盛土し、生活面を造成している。町屋建物、土坑、落ち込み、石組遺構などを検出している。特に東部での遺構の検出が顕著で、密集した状態で土坑、石組遺構、性格不明遺構などを検出している。遺構検出面の標高は、東部でT.P.0.3~0.9m、中央部でT.P.0.7~0.8m、西部でT.P.0.5mを測る。

(1) 東部

東部では、石組遺構、土坑等を検出した。切り合い関係をもつものが多く、特に素掘りの土坑については、個別の遺構としてとらえるよりも、それぞれが整地の単位である可能性を考えた方が適切ではないかと思われる。

石組遺構

S X 313

東部東端で検出した。南側は、SK123によって削平されている。北辺部に礫がやや円弧を描きながら並んでいる状態で検出しが、他の側面では石が見られない。そのため石組遺構とするにはやや確定要素に欠くが、第1遺構面で検出したS X128のように石組みが全周しない遺構がほかにもみられることから、ここでは石組遺構として扱う。

S X315を切っているほか、西側のS X316とも切り合い関係が認められるが、あるいはS X313とS X316は一連の遺構である可能性も考えられる。

長径1.07m、短径0.9m、深さ31cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

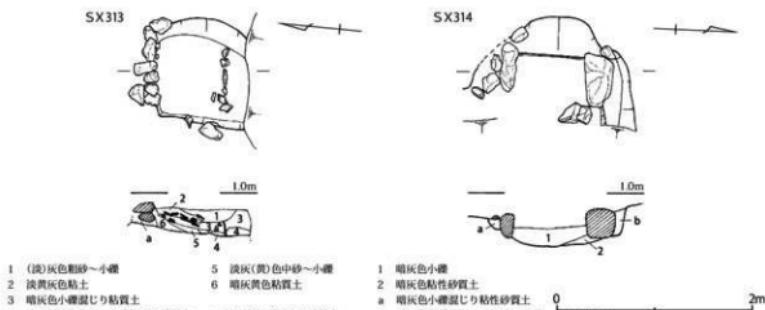


図30 S X313・S X314平・断面図

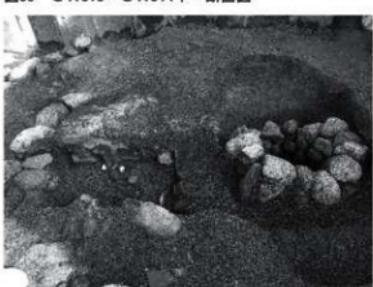


写真36 S X313断面（西から）



写真37 S X314石組み内断面（東から）

S X314

東部東端で検出した。西側のS X315を切っている。東側を搅乱によって削平されている。掘形は、現状で長径1.85m、短径1.1m、深さ45cmを測り、北辺は直線的であるが、西側は半円形状にやや突出するかたちとなり、南側は2段掘り状になりやや不定形となっている。内部をおそらく四角く区画するために北辺および南辺を大型の石材で囲み、西辺は石を用いずに垂直に仕上げているようである。

北辺と南辺の礫は長さ50cm以上を測る大型のもので、確実に原位置を保っていると考えられるのはこの2石のみである。北辺では東側において南側に倒れこんだ1石を検出した。元来西側の大型の礫と内側の面をそろえて並べられていたものと考えられる。またその南側に検出位置としてはやや低い位置で1石を確認した。ややくずれて原位置から若干動いている可能性も考えられるが、東側が鋼矢板設置時の搅乱で失われているため掘形の形状が明確ではなく、本来の掘形が丸みを帯びている形状をもっていた場合、現状のようにやや弧を描くように礫が設置されている可能性も考えられる。陶器、磁器、瓦が出土している。

S X315

東部東端、S X314のすぐ西側で検出した。東側の上部をS X314によって削平されている。石組みは、本来は1.0×0.8mの範囲を長方形に囲むように設置されていたものと考えられるが、東辺の石材は南半部しか遺存していない。掘形の規模は、2.18×1.7mを測る。北辺部分の石組みの外側にはさらに1列である。東辺部分はS X314に切られており、一部の石積みが施されており、2列となっている。外側の石積み上面のレベルは内側の石組み上面のレベルよりも一段高くなっている。本来階段状の施設であり昇降できるようになっていた可能性も考えられる。

外側石積みの一部に一石五輪塔（火水地輪）を、また西辺石組下段の石材には五輪塔の火輪が転用されている。土師器、陶器、磁器、瓦、土人形、キセルが出土している。

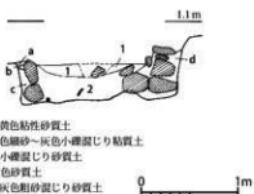
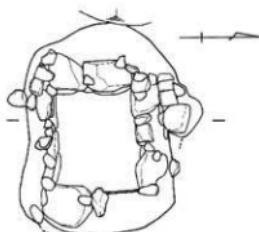


図31 S X315平・断面図



写真38 S X314石組み内完掘状況（東から）



写真39 S X315石組み内断面（東から）

S X 351

東部中央付近で、内部の規模が $1.1 \times 0.5\text{m}$ を測る石組遺構を検出した。さらに検出面はやや下がった位置になるが西側に少しづれるかたちで上部のものよりも一回り大きな石組遺構をもう1基確認した。下部で確認した石組みは、北辺の約 $1/2$ と東辺の大半の石が失われているが、本来の内部の規模は、 $1.25 \times 0.9\text{m}$ を測るものと想定される。

この2基の石組遺構の関係について検討しながら調査を進め、出土遺物も両者を区別して取り上げたが、出土遺物からは明確な時期差を示すことはできなかつた。ここでは上部のものをS X 351、下部のものをS X 351下部と呼称するが、造り替えの行われた結果を反映するものとして一括して報告する。

土師器、陶器、磁器、瓦、土鍤が出土しており、下部からは、飯事道具や銅製品も出土している。

- S X 351
 1 暗赤色粘質土と灰茶色細砂の互層
 2 淡灰(黄)色細砂と暗灰色粘土の互層
 3 灰色粘性砂質土
 4 暗灰(黄)色小礫混じり砂質土
 5 暗灰(黄)色粘質土

- S X 351 下部
 ① 暗赤色細～中砂
 ② 暗灰黄色小礫混じり細～中砂
 ③ (暗)黄色細～中砂

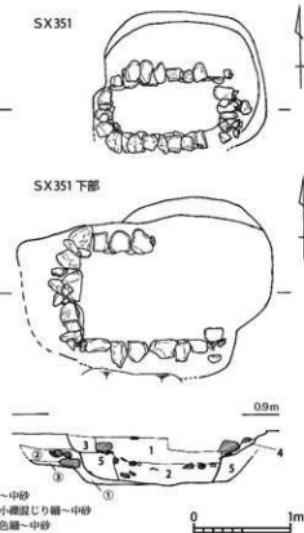
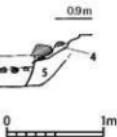


図32 S X 351平・断面図



写真40 S X 351断面（南から）



写真41 S X 351石組み内完掘状況（南から）



写真42 S X 351下部断面（南から）



写真43 S X 351下部石組み内完掘状況（東から）

土坑

東部では、土坑も多く検出している。これらの土坑は、第2遺構面以下の整地層を掘り下げながら順次検出した。土坑の平面形状は円形や楕円形などの比較的定まったかたちのものもあるが、一方で不定形のものもある。また深さも様々で、深いものは湧水層まで達している。密集している点も特徴的である。整地等に伴って順次掘削された穴の痕跡である可能性も考えられる。

S K301

東部西半で検出した。北側を搅乱によって削平されており、本来の規模は不明である。確認できた規模は、 $2.46 \times 1.92\text{m}$ である。深さは、42cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、飯事道具、銅製品、鉄製品、貝がやまとまって出土している。銅製品には、キセルのほか、容器状や針金状のものなどさまざまな形態のものが含まれる。

S K302

東部西半南端で検出した。長径1.56m、短径0.98mを測り、平面形は長楕円形を呈する。南部は径60cmの範囲がピット状に一段深くなっている、最深部の深さは55cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、キセル、鉄製品が出土している。

S K303

東部東半で検出した。北東側は搅乱を受けて失われており、また南側に位置するS X316を切っている。平面形は不定形を呈し、長径1.9m、短径1.36m、深さ59cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、漆製品が出土している。

S K305

東部西半で検出した。径1.0mを測り、平面形は円形を呈するが、南側はS X304と切り合い関係をもち、不明瞭である。深さ37cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S K307

東部西半で検出した。径0.87×0.82mを測り、平面形は円形を呈する。土師器、陶器、磁器、瓦、飯事道具、錢貨が出土したほか、炭化した板材が出土している。

S K351

東部東半で検出した。径1.0mを測り、平面形は円形を呈する。深さ14cmを測る。S X351、S X352を切っている。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X301

東部西半で検出した。長径2.0m、短径1.3m、深さ78cmを測る。南辺や東辺は直線的で両者の成すは直角に近いが、北辺や西辺はそれに対し直線的ではあるもののやや斜めに角度を振ったかたちを呈している。元来長方形に近い平面形を指向していたものが壁面の崩落等により不定形となった可能性も考えられる。土師器、陶器、磁器、瓦、土人形、キセル、鉄製品が出土している。

S X302

東部西半、S K302の北東側で検出した。長楕円形に近い平面形を呈するが、北側はやや直線的な上端形状を呈し、搅乱（瓦積井戸3）によってわずかに削平されている。深さは69cmを測り、湧水層に達している。底より50cm程度埋まった段階で陶器擂鉢を投棄している。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、土人形、錢貨、鉢津が出土している。

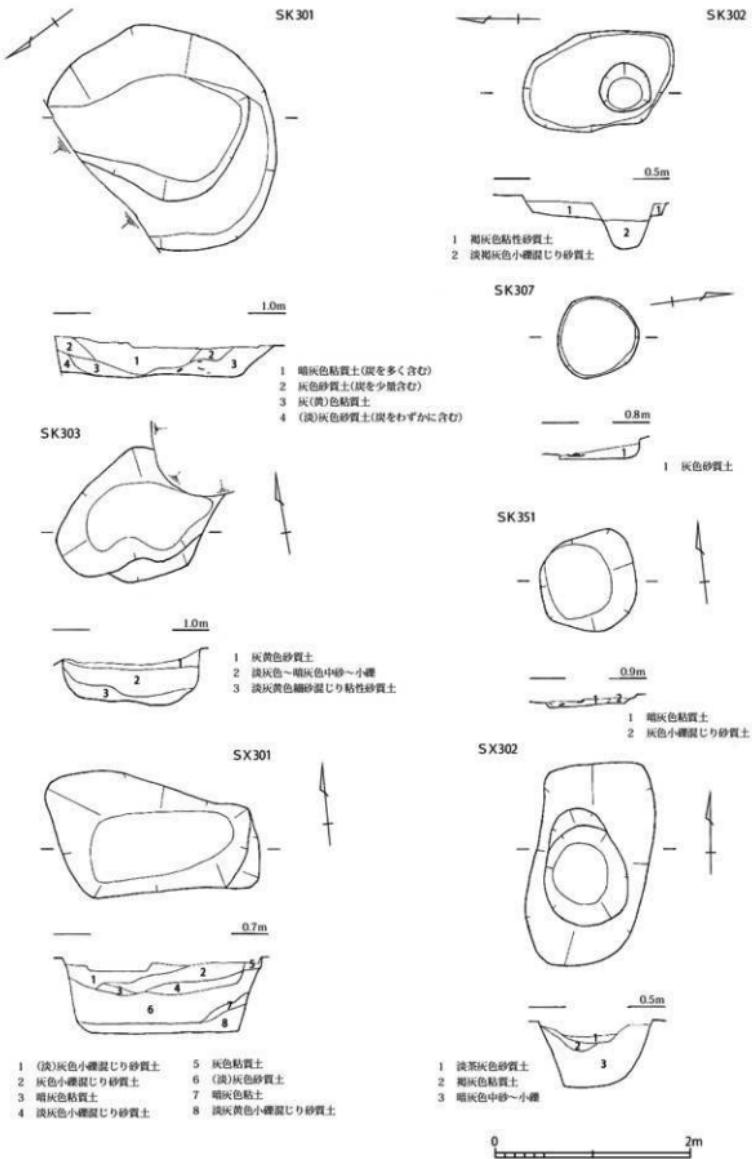


図33 SK301・SK302・SK303・SK307・SK351・SX301・SX302平・断面図

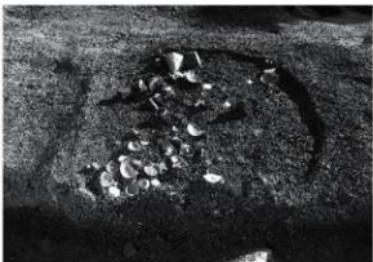


写真44 S K301遺物出土状況（北から）



写真45 S K301断面（西から）



写真46 S K301遺物出土状況（北西から）



写真47 S K301遺物出土状況（北西から）



写真48 S K302断面（西から）



写真49 S K303遺物出土状況（西から）



写真50 S K303断面（南から）



写真51 S K307断面（南から）

S X 303

東部中央南端で検出した。平面形は長方形に近いいたちを呈する。S X 304、S K 314と切り合い関係をもつが、先後関係については断割調査を実施したものの判然としなかった。おそらくS K 314より新しい時期の遺跡と考えられる。長径1.32m、短径0.9m、深さ45cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X 304

東部中央南端で検出した。上記のS X 303やS K 314と切り合い関係をもつ。平面形は長楕円形を呈し、長径2.65m、短径1.4m、深さ38cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X 306

東部中央で検出した。長径0.82m、短径0.38m、深さ15cmを測る。S X 322を切る。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、錢貨が出土している。

S X 308

東部中央北端で検出した。北東側は搅乱によって失われており、残存する規模は、長径0.82m、短径0.54m、深さ13cmを測る。平面形は楕円形を呈する。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、鉄製品、貝が出土しているが、貝を多く含んでいることに特徴がある。

S X 309

東部西半で検出した。長径3.26m、短径1.2mを測り、平面形は長楕円形状を呈するが、北西側はS E 105によって削平されている。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、錢貨が出土している。

S X 312

東部東半で検出した。S X 351に切られており部分的に検出したに止まる。あるいはS X 351下部の一部である可能性も考えられるが、明らかにできなかった。土師器、陶器、磁器、瓦、鉱滓が出土している。

S X 316

東部の東端、S X 315のすぐ南側で検出したで検出したS X 316は、複雑な形状をしているが、後述するように複数の遺構が切り合っている可能性が高い。

遺構の北半は東西方向に幅85cm程度の溝状を呈するが、南西側は長径3.28m、短径1.85mを測り、平面形が楕円形状を呈する土坑状落ち込みの形態をもつ。両者の切り合い関係が明確ではなく一体の遺構として調査を行ったが、北西部の溝状部分の下位で、土坑状遺構部分の北部が検出され、別々の遺構が切り合っていた可能性が高いものと考えられる。

また、溝状を呈する部分の中央部分で大量の石が検出された。特にしっかりと組み込まれた状況はみられず、北側から放り込まれた、あるいは崩れ落ちたよう斜めに堆積した状態で確認している。この石が集中する部分は特に深くなっており、1.3m以上の深さをもち湧水層に達している。またそのほか西側は深さ24cm程度と浅くなっているが、東端付近でもピット状に深くなっている部分があり、深さは一定ではない。単なる溝とは考え難く、さらに複数の遺構が切り合っている可能性も考えられるが、遺構の性格自体は不明といわざるをえない。

土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、土人形、錢貨、キセル、銅製品、鉄製品、貝などの遺物が多量に出土しているが、遺物の面からは切り合う遺構ごとの時期差については明瞭ではない。南部の土坑状部分の深さは、81cmを測る。



写真52 S K351断面（西から）



写真53 S X301断面（南から）



写真54 S X302断面（南から）



写真55 S X308断面（西から）



写真56 S X316東部断面（西から）



写真58 S X316謎集中部断面（西から）

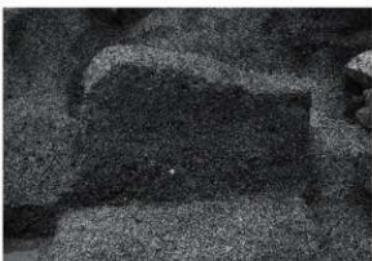


写真57 S X316西部断面（西から）

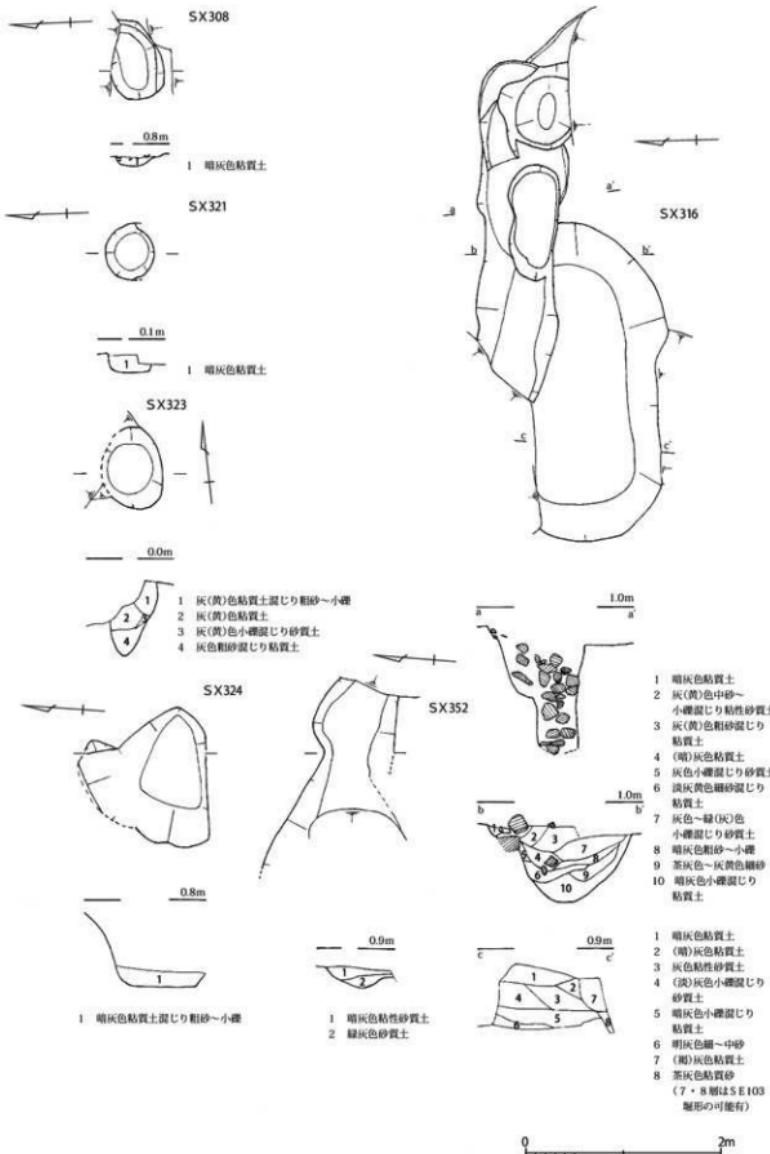


図34 SX308・SX316・SX321・SX323・SX324・SX352平・断面図

S X318

東部中央南端で検出した。北東側を搅乱によって削平されており、また西側もやや不明瞭であった。土師器炮烙がつぶれたかかちで出土したほか、土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X320

東部中央南端、S X318のすぐ西側で検出した。北部は削平され、現状で径36×20cmを測る。土師器炮烙が伏せられたままつぶれた状態で出土したほか、土師器、陶器、磁器、瓦が出土した。

S X321

東部西半南端で検出した。北西側をS X309によって削平されている。径50cm、深さ18cmを測り、平面形は円形を呈する。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X323

東部南東隅で検出した。近代以降の井戸によって削平されており、一部のみを確認したに止まる。深さ78cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X342

東部東半、S K303の下位で検出した。平面形は不定形を呈し、長径1.42m、短径1.35mを測り、本来の深さは77cm以上と考えられる。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X352

東部東半で検出した、幅70～80cmを測る溝状の落ち込みである。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。



写真59 S X318遺物出土状況（北から）



写真60 S X320遺物出土状況（北から）



写真61 S X321断面（西から）



写真62 S X323断面（南から）

(2) 中央部

中央部では、町屋建物4棟を検出した。町屋はT.P. 0.7~0.8m前後で、上層の第2遺構面と同じく幅3.8m前後の街路を挟んで東西に確認した。

町屋建物

S B301

街路西側に面した南半で検出した東西主軸の町屋建物である。検出状況から東西7.5m、南北5m以上の規模と考えられるが、南側は調査区外へ延び、全体の規模は不明である。礎石の遺存状況は良くないが、第2遺構面の町屋から復元すると街路側北東角の礎石の南側の一石および北西角付近の石の一群は、其々建物角に位置すると思われ、南側で検出したピット状の東西方向の一列は、土間床境柱列の礎石抜き取り痕と考えられる。イロリ、カマドは検出していない。

S B302

街路西側に面した北半で検出した東西主軸の町屋建物で、S B302の北側に位置する。検出状況から東西7.5m前後、南北3.5m以上の規模と考えられる。礎石の並びは検出されなかつたが、街路側南東で検出した礎石2石の内、北側の正位に据えた五輪塔（火輪）がS B302の建物南東角に相当する可能性がある。イロリ、カマドは検出していない。

S B303

街路東側に面した南半で検出した東西方向の町屋建物で、東西10.5m、南北5.5m以上の規模と考えられるが、南側は調査区外へ延び、全体の規模は不明である。東西方向の礎石列を8間分検出したが、土間床境の柱礎石と考えられる。イロリ、カマドは検出していない。

S B304

街路東側に面した北半で検出した東西方向の町屋建物で、東西10.5m、南北1.5m以上の規模と考えられる。下水管埋設設備の端で礎石1間分を検出したが、上層のS B204からの復元によると、建物の南端の礎石列の一部である可能性がある。イロリ、カマドは検出していない。

街路

第3遺構面においても、第2遺構面とほぼ同位置で南北方向の街路を検出した。

断面観察による街路構築状況は、基盤層である乳褐色細砂を少し窪め、淡茶灰褐色粘質土、粘性細砂の順に敷き、細砂で第4遺構面の路面を構築している。その上面に約40cmの厚さで粗砂を粘質土を挟みながら盛り、粘性細砂を敷いて細砂で第3遺構面の路面を構築する。この工程の各段階で道路西側の町屋境に粘質土を置いており、土留め効果とともに境界への意識が窺われる。

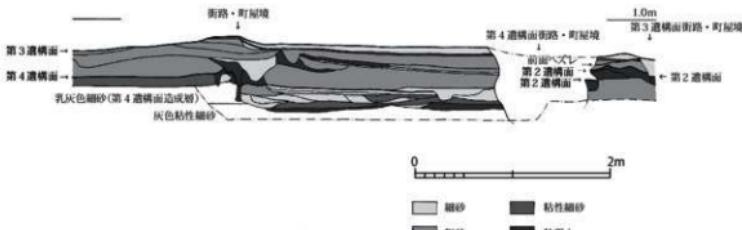


図35 街路断面図（第3・4遺構面）

(3) 西部

西部では、町屋建物2棟、石組造構2基、土坑1基、ピット5基を検出した。

町屋建物

S B305

西部のS B205の下位で検出した東西主軸の町屋建物で、東西方向7間および西側で南北方向の1間分の礎石列を検出した。東西幅8.0m、南北幅5.0m以上の規模と考えられるが、南側は調査区外へと続き、北側は後世の下水管敷設に伴い失われて、全体の規模は不明である。上層のS B205から、東西礎石列は土間床境の礎石で、北側は土間に相当するものと考えられる。

土間を構成する土層の中には大量の貝殻が含まれていた。貝殻は粉々に碎かれているが、中には貝の種類が判別できる程度のものもみられた。土間に内貝殻が多く含まれていることは、現代の石灰を用いる工法に通じるが、土間を強固にするために混入したものと考えられる。

S B306

S B305の北側で検出した東西主軸の町屋建物で、検出した礎石とS B206からの復元から東西幅8.1m前後、南北1.5m以上の規模と考えられる。礎石は大半が失われた状況である。

S B305、306はともに、イロリ、カマドなどは検出していない。

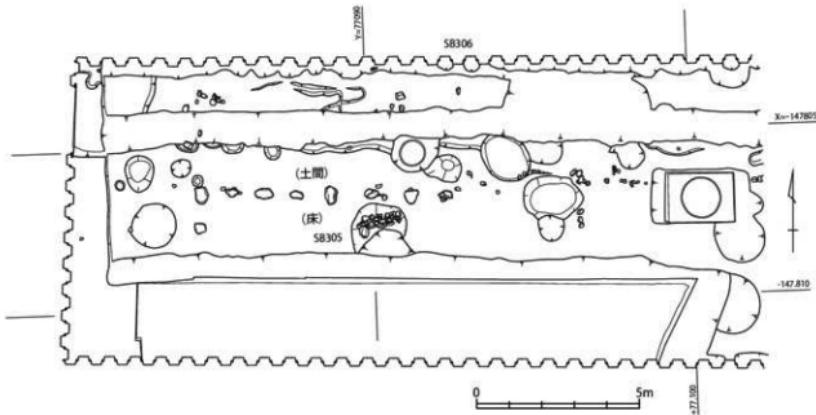


図36 S B305・S B306平面図



写真63 S B305土間貝層検出状況（北西から）



写真64 S B305土間貝層検出状況（北西から）

石組遺構

S K313

西部中央で検出した石組遺構である。長径1.8m、短径1.25m、深さ75cmの平面形が楕円形を呈する掘形内に、内径80cm前後に長径20~30cm、短径15cm前後の石材を組み上げていた。石材は最大で7石分が遺存していたが、東側は石組が確認されず、元来からなのか石材が再利用などによって抜き取られたのかは判然としない。底部からは常に湧水が見られる。石組み内埋土から土師器、陶器、磁器、土錘、銅製品が、掘形内から土師器、陶器、磁器、瓦などが出土した。

S X354

西部西半で検出した石組遺構で、直径2.1m前後、検出面からの深さ26cmを測り、掘形は平面形が不定円形を呈すると考えられるが、南側が搅乱の影響を受けているため、全体の規模は不明である。掘形内には底部に長径30~35cm前後のやや大きな石や五輪塔（水輪）を据え、その上に拳大前後の石を積んでいた。長方形状の石組のようにも見受けられるが、搅乱の影響により判然としない。土師器、陶器、瓦が出土している。

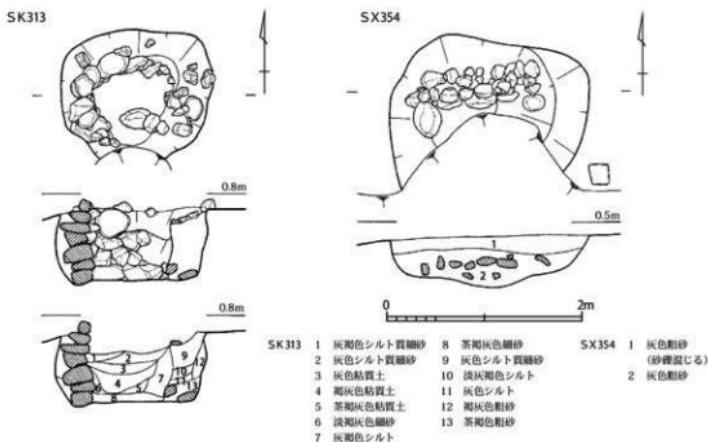


図37 SK313・SX354平・断面図



写真65 SK313断面（南東から）



写真66 SX354断面（北から）

胞衣壺埋納遺構

S P301

西部西端で検出した土師器壺壺埋納遺構である。直径0.35m、深さ20cmを測り、平面形が円形を呈する掘形内に、土師器壺壺が正位に埋納されていた。S B301の建物西壁の礎石列と、土間境礎石列の接点に位置する礎石の北側脇に埋納されている状況から、胞衣壺を埋納したものと考えられる。中央部西半の第1遺構面 S P101と同様な構造をもつものである。胞衣壺として転用されていた土師器壺壺は上半部を欠失していた。土師器壺壺以外には出土遺物はなかった。

その他の遺構

ピット

西部西端の中央部、S B303の土間西端付近にいくつかのピットを検出した。

ピットは4基検出され、直径0.5~0.7m前後であるが、下水管埋設溝の南肩附近に北側を欠失している状況であった。この下水管埋設溝付近は軟弱な土壤に起因して、段丘状に陥没しており、元來の形状・深さについては不明である。これらのピットは土間境の礎石列と並列しており、建物の土間に相当する部分での検出であるが、その用途やS B303に伴うものであるかは、不明であると言わざるを得ない。ただしこれらピットの検出位置や、S P304については、礎石と考えられる石を据えたものとも考えられることから、礎石の掘形や抜き取り痕である可能性も指摘しておきたい。

S P304から土師器、陶器、磁器、瓦、土錐が出土している。

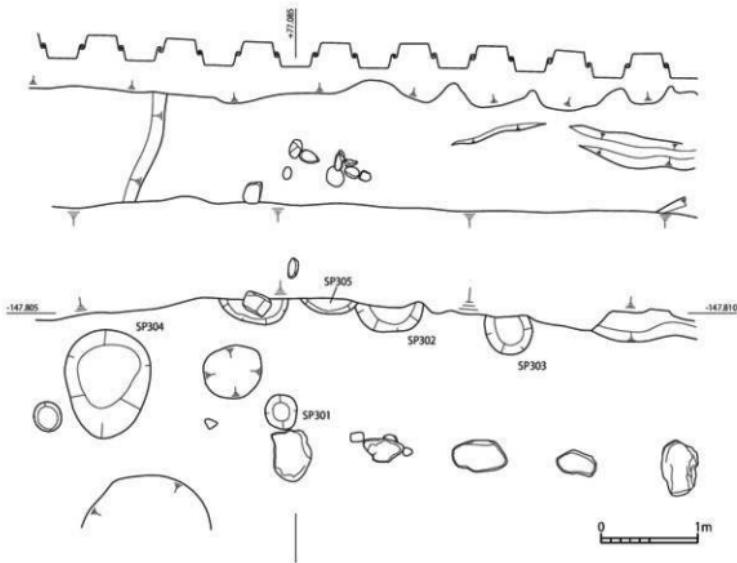


図38 西部西半遺構平面図

第5節 第4遺構面

(1) 東部

東部では、T.P. 0.1～0.2mで、石組遺構や土坑、ピットを検出した。

石組遺構

S X 401

東部東半で検出した。西側をS E 103によって削平されている。内径約55cm程度の規模で、長径17～25cmの小ぶりの石を用いた、半円形状に巡る石列を確認している。削平されている西側にも本来石列があり、円形に巡っていたと考えられる。S X 402を切る。掘形の規模は、0.92×1.0m以上を測り、深さは20cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐、漆製品が出土している。

土坑

S K 403

東部東半で検出した。S X 404を切る。直径1.07×0.7mを測り、平面形は梢円形を呈する。深さ23cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X 402

東部東端の南部で検出した。1.08×0.92mを測り、平面形が梢円形を呈するものであり、前述のS X 401に西側を切られている。深さは37cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S X 404

東部東半で検出した。中央部分をS K 403に切られている。深さ32cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。



写真67 S X 401石組み内断面（南から）



写真68 S X 401掘形断面（南から）



写真69 S K 403断面（西から）



写真70 S X 402断面（南から）

ピット

S P401

東部東端で検出した。

0.52×0.48mの規模で、平面形が円形に近い形をもつ掘形内部に、黄色粘土を貼っており、その内部の径30cmの範囲に炭が堆積している。

町屋建物のイロリ状のものである可能性も考えられたが、周囲で町屋建物を確認することはできなかった。

遺物は出土していない。



写真71 S P401断面（西から）

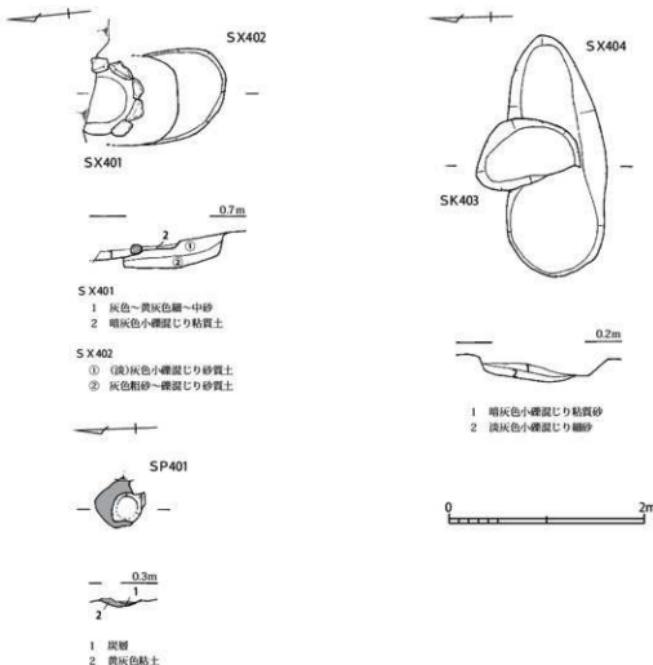


図39 S X401・S X402・SK403・SP401平・断面図

(2) 中央部

中央部では、町屋建物3棟、井戸2基、土坑4基を検出した。町屋はT.P.0.2m前後で、幅3.1m前後の街路を挟んで東西に確認した。街路は判然としないが上層よりもやや狭い可能性がある。

第4遺構面の街路および東側の町屋（S B402・403）範囲の造成に際しては、ベース層である暗褐色粗砂層を40～70cm掘り下げ、粘土・細砂を互層とした地盤改良を伴う造成を行っていた。その範囲は、街路の西側1m付近から東へ18.5mの範囲に及ぶ。この造成層中には土師器、陶器、磁器、瓦、土錐などとともに、貝殻や五輪塔などの石造物も混入していた。この地盤改良は浜堤上の砂を主体とした土壌へ、街路や町屋を構築するために、地盤の安定を目的として実施したものとみられる。この造成層は中央部西半へとは延びないため、町割計画を基に大規模な街路の築造と町屋範囲の造成が、地盤改良とともに実施された可能性がある。また、遺構面に焼土や炭を含む範囲があるが、造成土中にも混入していることから、火災に伴うものであるかは不明である。

畝状遺構

中央部西半、後述するS B401の南側で南北方向の畝状の凹凸4条を検出した。

畝状の凹凸間の窪みは幅15～40cm、検出面からの深さ5cm前後の溝状を呈し、窪み間は東側が幅0.55m、西側は0.7mであるが、中央部の2条は0.85～1.0mとやや広い。東側の街路面からは北側で約0.15m、南側で0.08m低い。上面を第3遺構面造成層である淡褐色細砂層が覆っていた。畝の可能性も考えられるが、整地・造成を行なう上の造作とも捉えられる。

町屋建物

S B401

街路西側に面した北半で検出した東西主軸の町屋建物である。検出状況から東西4.4m、南北3.3m以上の規模と考えられるが、北側は調査区外へと続き、全体の規模は不明である。礎石の可能性がある一石を検出した以外は、イロリなども検出していない。

西側と南側は0.15～0.2m前後の比高で下がっている。兵庫津遺跡で町屋背後がなだらかな斜面となり空閑地へと下がる例は、第42次調査第3遺構面検出の町屋にも同様の例がある。

S B402

街路東側に面した南半で検出した東西主軸の町屋建物である。イロリを検出したことから、町屋であると判断した。上層のS B203やS B303から、東西幅11m前後と推定される。イロリは一辺約0.8mの正方形と推定され、一辺1.1mの掘形内に黒褐色粘質土や灰色シルトで構築している。

S B403

S B402の北側で検出した東西主軸の町屋建物で、礎石等は失われ、全体の規模は不明である。



写真72 S B402イロリ全景 (北から)



写真73 S B403遺物出土状況 (南西から)

中央部西半、S B401と畝状の遺構以西、西部との境までの範囲は、町屋建物背後の空閑地と推定され、井戸2基と土坑4基を検出した。

井戸

S E401

掘形の平面形はやや楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.25m、深さは25cm前後を測る。直径1m前後の井戸枠を設置していたことを土層断面観察において確認したが、木質部分など遺存していなかった。土師器、陶器、磁器が出土している。

S E402

掘形の平面形は直径1m前後の円形を呈し、深さは30cm前後を測る。直径75cm前後の井戸枠を設置していたことを土層断面観察において確認したが、木質部分などは遺存していなかった。陶器、磁器が出土している。

土坑

S K401

一边0.85m前後を測り、平面形が方形を呈する土坑で、深さは35cm前後を測る。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

S K402

長径1.25m、短径1.1mを測り、平面形が楕円形を呈する土坑で、深さは45cm前後を測る。土層断面観察から井戸である可能性が考えられる。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐が出土している。

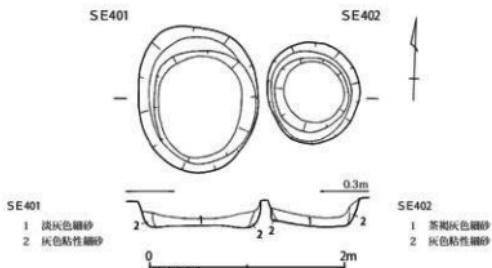


図40 S E401・S E402平・断面図



写真74 S E401断面（南から）



写真75 S E402断面（南から）

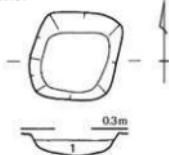
SK 404

中央部西半で検出した、平面形が方形を呈する大型土坑で、一辺2.3～2.5m、深さ35cm前後を測る。東側はS X117によって切られている。土師器、陶器、磁器、瓦、土錐が出土している。

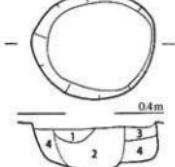
SK 405

直径1.6mを測り、平面形が円形を呈する土坑で、深さ40cm前後を測る。SK 402と同じく、土層断面観察から井戸の可能性が考えられる。土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

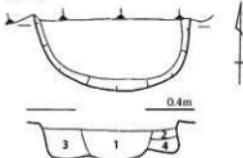
SK401



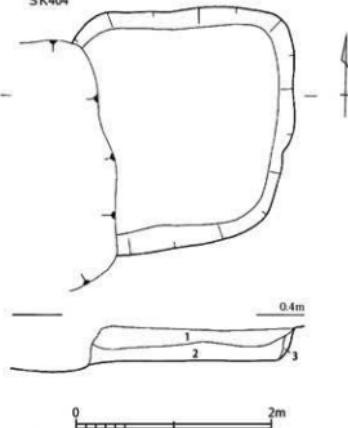
SK402



SK405



SK404



- | | | |
|-------|-----------|--------------|
| SK401 | 1 灰色粘性細砂 | SK404 1 灰色粗砂 |
| SK402 | 1 和灰褐色細砂 | 2 噴灰褐色細砂 |
| | 2 噴褐色粘性細砂 | 3 噴灰色粗砂 |
| | 3 黑褐色粗砂 | |
| | 4 噴灰色粘性細砂 | |
| SK405 | 1 淡灰褐色細砂 | |
| | 2 和灰褐色細砂 | |
| | 3 灰色細砂 | |
| | 4 绿灰色細砂 | |

図41 SK 401・SK 402・SK 404・SK 405平・断面図



写真76 SK 402断面（北東から）



写真77 SK 404断面（北から）

(3) 西部

西部西端においても、土壤の入れ替えを伴う大規模な造成が確認された。

造成はベース層である暗褐色粗砂層を最大で80cm前後掘り下げ、粘土・細砂層による地盤改良を伴う。中央部東端の造成に比べて、粘質土・粘性細砂を厚く敷いて造成を行っており、安定した地盤改良を指向しているものとみられる。造成範囲は調査区西端部から東へ11.7m付近までおよび、造成層からは土師器、陶器、磁器、瓦、土錘や、鉄製品や銭貨などの金属製品、五輪塔など多くの遺物が出土した。なお、調査区西側へ向かって地盤が上がるよう造成しており、さらに西側には一段高い屋敷地の存在が推測される。西部では、この面においても上層と同じ場所に石列を確認した箇所があり、礎石等は確認していないが、町屋や屋敷割の存在が窺われる。

S B 404

調査区の南半に存在するとみられる東西主軸の町屋建物である。東側で東西方向の石列を確認したため、町屋と判断した。上層の町屋と同規模であれば、建物は東西9m前後と考えられる。

S B 405

調査区の北半に存在するとみられる東西主軸の町屋建物である。礎石と推定される石材2石を確認した。S B 404と同じく、上層の町屋と同規模であれば、建物は東西9m前後と考えられる。

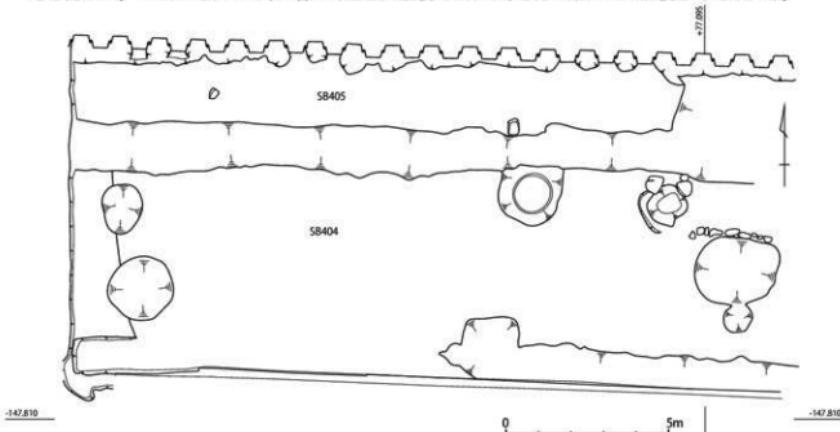


図42 S B 404・S B 405平・断面図

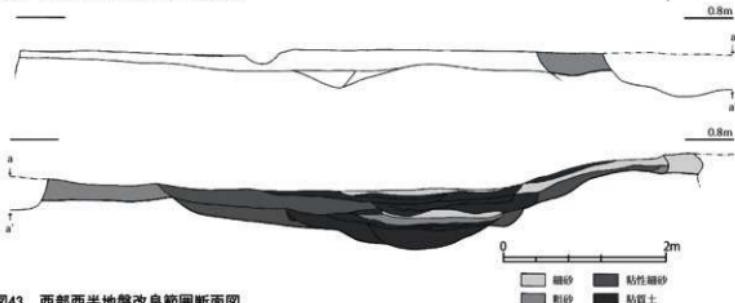


図43 西部西半地盤改良範囲断面図

第6節 第5遺構面

東部では、T.P.-0.2m前後で土坑、ピット、溝状落ち込みを、中央部ではT.P.0.0mで土坑を検出した。

(1) 東部

土坑

S X501

東部西半で検出した。径1.1m前後を測る土坑で、平面形は円形を呈する。深さは17cmを測る。S P502、S P503を切っている。瓦が出土している。

溝

S D501

東部東端で検出した。調査段階においては溝状の遺構ととらえていたが、北東側と西側が搅乱によって削平されているため本来の形状は不明である。あるいは土坑である可能性も考えられる。幅1.32m、長さ2.73m分を検出した。深さは20cmを測る。土師器、陶器、磁器、瓦、骨が出土している。

ピット

東部西半で径20~40cm程度を測るピットを15基程度検出している。S X501の周囲でややまとまって検出しているが、建物などの規則性は認められない。

S P502、S P503はS X501によって切られている。S P501から陶器、S P502~S P504から瓦がいずれも少量出土している。

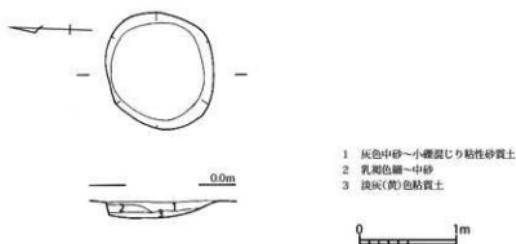


図44 S X501平・断面図



写真78 東部第5遺構面全景（西から）



写真79 S X501断面（西から）

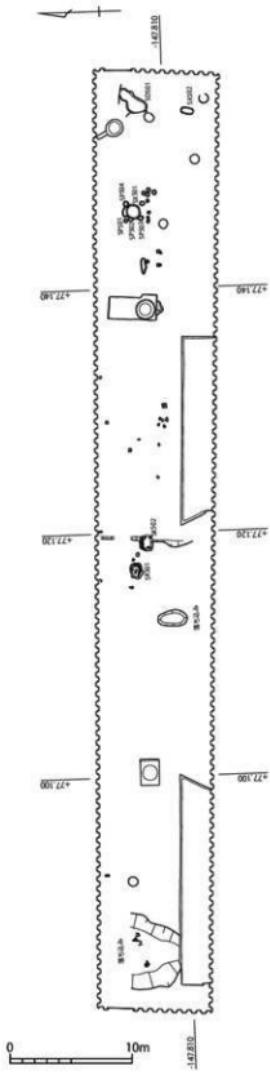


図45 第5遺構面平面図

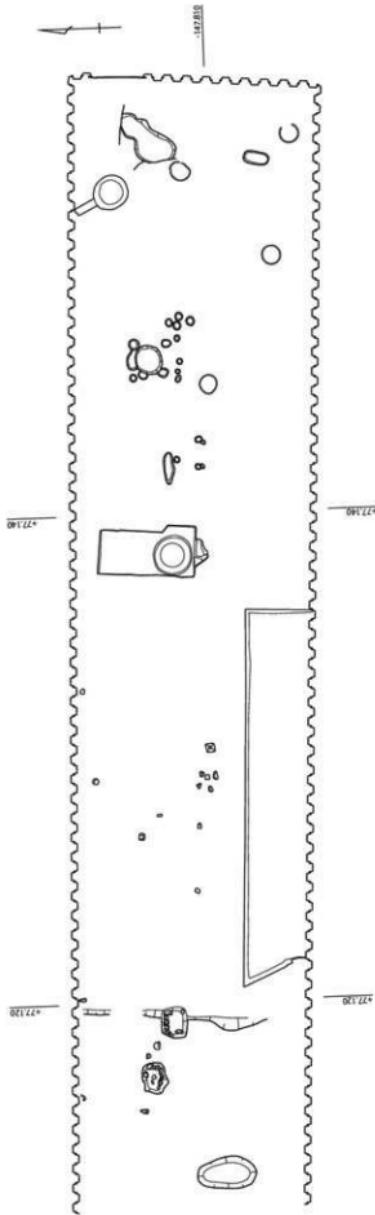


図46 第5遺構面(東半)平面図

(2) 中央部

中央部では東半において、第4遭構面の造成に伴う地盤改良の範囲に切り込む形で、土坑2基を検出した。このことから地盤改良に伴い、基盤層である暗褐色粗砂層を掘り下げ後、造成を行なせて行く段階で、一時タイムラグが発生していることが窺われる。しかし検出遭構が東半での土坑2基のため、造成の進捗単位と土坑の構築時期との関係についての検証は困難である。

土坑

S K501

長さ1.25m、幅1m前後を測る土坑である。平面形が長方形を呈する掘形内に人頭大程度の大きさの石を並べていたとみられるが、一部に石が失われている部分がある。深さは、10cm前後を測る。石組み内から陶器、磁器、瓦、錢貨が出土している。

S K502

S K501の東側で検出した土坑である。長さ1.3m、幅1.05mを測り、平面形が方形を呈する掘形をもつ。掘形内に拳大～人頭の石を並べている状況を検出したが、一部石が失われている部分がある。現状では2段分を確認している。深さは35cm前後である。土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品が出土している。

S K501、S K502とともに性格については不明である。

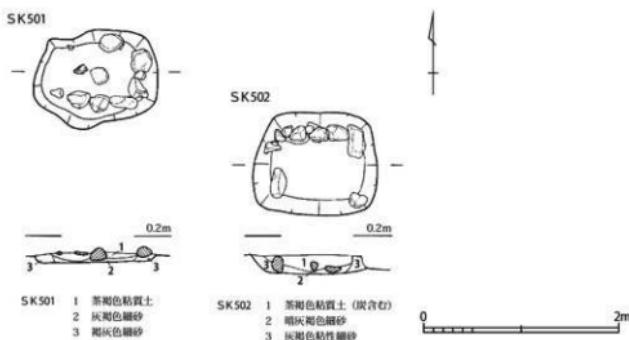


図47 S K501・S K502平・断面図



写真80 S K501断面（南から）



写真81 S K502断面（南から）

(3) 西部

西部西端では、前述した第4遺構面の造成に伴い、大規模な地盤改良が行なわれていた。

この造成範囲の調査区西端付近は、東西幅6m前後の範囲を深さ80cm程度掘り下げた、落ち込み状を呈しており、底部からは大型動物遺存体や貝殻、板や棒状の木製品が出土した。造成が始まる前もしくは造成に伴い廃棄されたものと推測される。

出土した動物遺存体は、東海大学海洋学部 丸山真史氏に同定していただいた。

大型の動物遺存体は哺乳類クジラ目で、下頸骨と焼骨と思われる。イルカよりも大きく小型のクジラと考えられる。小型のクジラは瀬戸内海へも進入することがあるとされるが、今回出土した遺存体は、兵庫津近海での捕鯨によるものかは定かではない。解体痕などは確認されておらず、一部のみの出土であり、その性格は一考を生じるものである。

他に西部西端の第4遺構面造成層から出土した動物遺存体には、魚類のエイ・サメ類の椎骨があり、貝類にはアカニシ、テングニシ、イタボガキ、イタボガキ科の殻があった。

出土した動物遺存体の詳細については、第3章第8節を参照されたい。

この落ち込みの底部はT.P. -0.5mであり、湧水が著しい。これより下層は、ベース層である暗褐色混礫粗砂層で、遺構・遺物を確認することはできなかった。

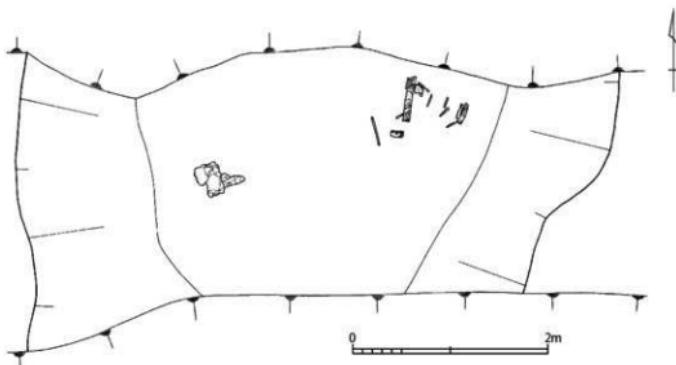


図48 西部落込み内遺物出土状況平面図



写真82 西部最終層全景（北東から）



写真83 西部西端最終層遺物出土状況（南から）